Aug 1890
no. 226

女學雜誌

明治二十三年八月十六日發行
第二百二十六號
一册六錢。毎土曜日發兌。

社説 鳴立澤に於ける西行
清楚純潔愛すべき
新譯小説 小公子 若松しづ
右次號より掲載す
内助の功用 中島俊子

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 226. August, 16th, 1890.

第二百二十六號目次

EDITORIAL: Wife, a Helpmate. The Transient World.

MISCELLANEOUS:—Wifely Help. How do you treat your Hired Girl? (Frances E. Willard). A Summer Journal. Mrs. Carlyle's Soliloquy. The Secret of Economy. The Bean cheese was thrown away. The Tourists. Midnight Stars. An Interview with Mrs. Komatsuzaki. Humourous.

CRITICAL NOTES:—A Sequel to "Ukiyo."

OPEN LETTERS.

CONTRIBUTED ARTICLES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

社説 鳴立澤に於ける西行○細君内助の辨(下)

雑録 内助の功益(中島俊子)○召使ひ扱かひ方如何にやさ、主婦の方々に問ひまゐらす○消夏録○カーライル夫人獨語○經濟の秘訣○豆腐を棄つ○山林の遊客○深夜の夢○小松崎古登女を訪ふ○きよめ豆腐

批評 小説「うき世」の後に書す(いほる)

寄書 女學子に與ふ○文論

時事 北海道離宮○英國女皇 一私民に墓與す○コレラ病○監獄の末路○好色會○觀劇會○或大煙會○ダイヤー氏債歎○動物保護會○傍聽門の紛○英國に兄を殺すの鬼あり○女護島○ライダア女史の來信○女遊記○卒業女學生○洲澤をのへ女史○塚本ふじ女史○杉江たづ女史○村立製糸傳習所○伏見産婆養成所○花巻婦人會○長崎のコレラ○横山白蓮女學校○共愛女學校○府縣記事○通信○週報

Women in Japan.

"THE BOMBAY GUARDIAN" has just published a report of the Anti-prostitution movement in Japan written by Rev. W. E. Robbins and calls it the "Great Moral Crusade in Japan." The following are fragments of the report.

"Rays from the Farthest East."

*"Judging from the distant glimpses we have been catching of this "land of the sun's origin," I was prepared to find the state of morals exceedingly bad; but I am glad to be able to report progress even here. Though there is a reaction against Christianity for the present, yet it is only temporary, and even non-christians have to acknowledge what the gospel is doing and they themselves are catching this spirit of moral and social reform. * * * * I find this desire for reform especially among the students. While our vessel lay in the harbour of Nagasaki, I had the pleasure of addressing the young men of the Deshima, or Cableigh Seminary, about half of whom are Christians converted last year, and was gratified to see how all of them were interested in the subject.* * * **

*A Doshisha I had the privilege of addressing briefly the 700 students. I found that the subject had been so exercising them that all were ready to sign a strong memorial to the Government which was being drawn up. * * * **

Hastening on to Tokyo, I was in time for the convention which had been called to concert measures for future action. About forty delegates were present representing all parts of the country as also the various faiths Buddhists vying with Christians. It was agreed that a memorial to the General Government should be widely circulated and signed before the meeting of the first Parliament in November, asking them to abolish their system of licensing and regulating vice, as has already been done in a measure by the local authorities in some places etc., etc.

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第十三卷 第二百二十六號 明治二十三年八月十六日發兌

社説

鳴立澤に於ける西行

われ一日大磯に遊ぶ。病を養ふの親友を尋ねたる後は、先づ鳴立澤を見んとを欲せり。われ久しく西行を愛す、否な愛すと云はんよりも寧しろ之を憫れみたり、而して之を憫れむの情、縁なき他族を懐ふの類にはあらず、殆んどわれと同情同感の一友人を懐ふの情けを以て之を憫れみたり、蓋し之れわれの一友人を懐ふにはあらずして、寧しろわれの前人を憫れみつるなり。昔しわれ至つて西行と感を同じくせり、今や一步先光を認ためて多少の安慰を得、顧みて彼を思ふ、心密かに同情の念なくんばあらず。西行は希世の人豪なり、彼もしわれの此言の葉を聞かば反りて冷笑やすらん、左れどわれは必らずしも西行を憫れむと云はず、世の西行に類するの人を憫れむと云ふのみ。昔しはわれ彼の友たりき、今のわれ即はち昔しのわれを憫むなり、今のわれは彼と離る、今我即はち彼の友人を憫れむのみ。

万感解しがたき程に複雑し、鳴立澤を見んとするの念、禁じがたし。此日、彼の親友を伴なひて徐むろに歩し、くさぐの掛念の中に早くも其の所ろに到りぬ。或は心懼れ、或は心躍り、西行は抑も如何なる風光に感じつるかと見廻はしたり。入口に鳴立澤と標し、人を防がんが爲めに嚴めしき門を建て、老父机によりて、來て見ん人の多かれかし、寄捨する金の多かれかしと待ち貌なる、總じて此等は古しへの遺念にはあらず。われ直行して向ふに到れば、圓位堂あり、文覺の刻みたる西行の木像を置ゆ、傍はらに石塔累々として分もなき吊ひの歌を銘し、尚且つ曾我の十郎に親しみぬと語り傳ふ虎の肖像を圍へり、此像むかし吉原の遊れ女二千人の寄附に係はるよし、夫だにあるに、醫師松本某と云へる人、其の假りの妻何子とやらんの石碑を少しく小高き處ろに建てぬ、俗氣紛々として嘔吐を催うすに足る。われは鞭を以て總べて此等を拂ひ除かずんばある可からず、而して只だ殘る所ろの者は、空吹く松風の音、磯打つ荒波のひゞき、生ひ茂る葦の原、微かに流るゝの澤、松に枕らして建てたる怪し氣の茅屋根也。想ひ見る、昔し此のあたりは、一面の濱邊なりき、固より家なくして、草多く茂つらん。玆に風流なる翁ありけり、磯に打上

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

げたる大ひなる葦を拾ひ、僅かに腰掛くる迄の小さき廬を結びぬ。翁媼らに茶を煮て此の風光を愛觀しつるか、もしくは共に此の風光を見んとするの人を歡待しつるか、われ明らかに之を知らず。

一日、日すでに西天に近づき、暮色將に掩はんとするの時、西行、行脚して端なく此を過ぎ、暫し息はんとて彼の廬に入りぬ。衣は垢に染み、顏ばせは最とやつれたり、辭ば細くして靜かに、風采何の變はりたる所ろを見ず。翁迎へ入れて最と安らかに光景を觀せしむ。

西行沈吟して早く傍はらに人あるを忘れぬ。暮色黑きを增して、海面いよ／＼白し、怒濤打よする毎に、雪を飛ばし珠を散らす、響き百雷の落つるが如く、聲退ぞけば忽焉沈靜、則はち松風の哀しく歔欷するを聞く。

西行、人世の果敢なきをかこち、人位人情の頼むまじきを感じ、北面武士のいかめしきは泥人形の怒るが如く、妻子珍寶の心にかゝるは月の前の雲の如し、合離集散定まる所ろを知らずとせば、之を以て念ひを慰ますは、空を打ち風を切るに似たり、慷慨も、愛情も、涙も、腕力も、抑も何の効かあらんぞ。則はち妻を去り、子を蹴り、上の御覺へを衣を脫ぐが如くに脫却し奉まつり「前途未だ定まらずと云へども、俗情はすでに頼むに足らずとて」、走るが如く人世を后にして譽れの山を越へぬ、

鈴鹿山うき世をよそに振棄てゝ
何如になりゆく我身なるらん。

爾來、村翁に聞けば村翁は貴人の知らぬ歎げきを歎き、乙女に問へば乙女は落ちて郎の頼みなきを訴ふ、富めるもの富めるにあらず、貧しきもの貧しきを以て終りがたし、人世到る所ろに無常あり、啻に都門權勢に鬪ふの巷のみにはあらざるなり。鄙も藁屋も世すて人も尙ほ安きとあるなし、去つて山林に入れば、山林亦泣き、猿猴悲しく叫ぶ、

枝折せで何山ふかく分けいらん、
憂きときかぬところありやと。

然れども遂に憂きと聞かぬ所ろのあらざるを悟りぬ。何んとなれば己が心すでに憂るが故に、心の存する所ろ何處にも憂ひあらざるなし、西行一日豁然として大悟す、萬法一に歸し、內外同根となる、憂ひもなく悲しみもなく我もなく人もなし、丹田すみ渡りて、月も映り、草も映し、露も落ち、雷も落つ、左れど遂に私慾私情あるなし。此に至りて我を忘れ、亦

人を忘れ、人類を忘れ、自然界を忘る。然りと云へども、是れ豈に人の眞情ならんや、人八荒にさまよひて、唯だ一つの生門に入ると能はず、此に於てか万景寂殺、世事悉とく常なし。エメルソン曰く、世を觀ずるは一種の水晶を見るが如し、之を或る一角の隅より眺めざれば遂に眞との光彩を見ずと。古來人の世のなげきは其の眞地位に立たざるの故なり、假の世に寓し、假の富に安んじ、假の人情に温たまる、一朝假のうたかた泡沫と消え去る時は、則はち無常と謂ふ。世間豈に無常ならんや、無常もし常ならば人之を歎くとなし、無常の無常なるは即はち常なるが爲め耳。悲しき哉同胞多くは眞理に到着せず、居常夢に夢みて夢破るれば則はち寤なしと云ふ、安んぞ知らん夢の破るゝ所ろ則はち寤に入るの門なるとを。世人無常を感ずるの夕べ則はち天地の大道に感ずるの朝たなり。禪僧の世事を見て一切空なりとするは善し、世事一切空なり、而して世事以上に一ツの大道理確立す、底津岩根の動かざるが如く、大海原の汲み乾すと能はざるが如し、大にして固きものある也。左れば、眞との人情は彼我を忘るゝと能はず、又愛着戀思の念を去るとあたはず。人情かつて僞はりの情に醉へり、此の醉さめて僞はりを悟とる、頗ぶる好しと云へども、悟して則はち惣べての人情を滅却するに至りては、遂に亦た大安を得ると能はず。西行すでに、我を忘れたりと思へり、世上亦た哀事樂事の別なしと觀ぜり、彼れ無心にして海面を眺め、歌よまんとてあせるにもあらず、暮かゝるとて急ぐにもあらず、放心寂滅して只だ沈吟しつゝありき。秋の夕べ、天いと悲しく、波は打よせつ又打かへして定まりなし、松風歎じ、葦動く、澤の面て水の雲漠々として心なく登るに似たり、時に一鳥泣叫して飛び出て、長く鳴いて波上を過ぐ、山の如き大濤動き來るのとき、すでに其影を沒す、暮色いよ〳〵さびし。此に於てか、人情は自然を現ず、多年之を消磨し、之を抑壓すと云ふと云へども、人情は其僞はりなき時に於て、其自然を現はさずと云ふとなし。西行、思ふとなく打よみて、

心なき、身にも哀れは、知られけり、
鴫たつ、澤の、秋の夕ぐれ。

と吟じぬ。實に是れ心なき人の心にはあらず、心なからんとするの人も、遂には斯る心無くんばあらず。われ、此事を思ひ、西行昔し此處にて休らひしか、彼處にて休らひしかと見まはし、或は、松蔭に倚り、或は石の上に腰か

け、久しく打棄じて去るとなし。飛鳥井卿昔て此澤に遊び、

あはれさは、秋ならねども、知られけり、
　鴫立澤の、むかしたづねて。

と詠じけるとか、われ亦た同じきの感あり。

何を詠じ玉ふやと、親友は打笑みたり。われ亦た打笑ひて、漸やく其處を立ち出でぬ。斯て磯邊を歩みぬ。雨の俄かに降るに會ひぬ。知らぬ間に歩みて宿に歸りぬ。親友と共に茶を喫しぬ。左れど久しく、彼の感じを消すと能はざりき。

斯て、其夕方の汽車に乘りて京に歸る。雨すさまじく降り、悉とく窓の戸を閉ぢぬ。室内にて曾て一と度び見し人に出で會へり。其人しきりに基督教の事を語ぬるにより、われはわが信仰する所ろ多少を語りぬ。云く、基督教の信徒とは基督の弟子と云ふの義なり、孔門の弟子孔子を慕ふが如く、彼等は基督を慕ふなり、基督の言行載せて聖經にあり、聖經は論語の如く教理を說きしものにあらず、只だ基督の言行を不十分に載せたるもの也、古來基督の如き人物稀れなり、孔子も釋迦もソクラテスもアレキサンダーも之に及ばずとは、ナポレヲンも既に言ひぬ、ワロン、スチウワート、ミルも既に言ひぬ、基督教徒は即はち此偉人物の言ふ所ろを信じ、且つ其行に傚はんとするもの也、教會とは其門弟の集りたる學校なり、宣教師は教師なり、安息日は其課業あるの日なり、基督信徒は悉とく有德圓滿と思ふは誤まれり、即はち此に達せんとする者の、一學派なり、一門集なり、云々と。

汽車川崎ステーションを去る遠からず、車俄かに進向を止めたり、汽笛いと怪しく鳴りぬ、掛りの人數人走り廻れり。嗚呼無慘、何人なるらん、わざと線路に首を當て、汽車に引き切られて死したる也、首碎けて散り、鮮血淋漓たり。

滿腔の情けに溢れて歸京す、家の樂しみ何ものか及ばん、若し愛を長しなへに續くものとせずば、人世實に苦しきもの也、われは愛と云へるものを知りてより、縱よ人靈の死せず滅せざるとを信ず。妻、新聞紙を示して云く、コレラ病如此く激烈なり、死する人如此く多しと、われ三たび胸を打ちぬ。

嗚呼世上の同胞乞ふ少しく人世の運命を思へ。希はくは先づ無常を觀ぜよ、而して后ち有常に入れ、希はくは先づ禪僧たれ、而して后ち基督の如くあれ、又願はくは先づ西行たれ、而して后ち人情を愛しホームを樂しむの人とあれ。われ太だく西行を憫れむ。昔しのわれを憶ふが故に、今の信ずる所ろを今の同胞に告げずんばある可らず。

細君內助の辨（下）

八。下婢

方今細君が爲す所ろの事務は、殆んど半ば過る迄て、素と下婢が爲すべきの事務なりとす。但だ下婢の心得の卑しきと、細君の使ひ方の宜しからぬとに依り、下婢も細君も共に終日忙がはしくして、而も家政思ふほどに整はず、主人は叱り、細君は怨み、下婢は膨れ、一家常に面白からずして、万事いよ〳〵亂雜す。其の源づく所ろを察するに、多くは下婢を使ふの方其宜しきを得ざるに因る。

蓋し下婢は細君の秘書官たるべし。秘書官の大臣に於けるは手足の一身に於けるが如し、間だ柄如何にも親密にして助力到らざる所ろなく、其の關係も亦左程に見惡しとせず。故に吾人が下婢の事を言ふや、毎度秘書官を以て比喩となす、之が爲めに前年警視廳より召出され、云々の譴責を蒙むりたるともありと云へど、然れども又亦秘書官を以て喩ふるの止を得ざるを感ず、他に適例の少なきとを覺ふるが故也。

左れど、今の細君と下婢との間柄を細かに吟味すれば、成程、大臣と秘書官との關係を以て之に比例するは、些さか勿躰なきに似たり。方今の下婢、細君に對するは、宛から亡國の臣僕怨ある打勝手に屈服するが如く、又細君の下婢に對する、恰も謀反の下心ある亂臣を忍んで遣ひ居るに似たり、互ひに恐ろしき眼光を以て睨み居るなり。細君は惟へらく、彼れは一刻も油斷の成らぬものなり、何如にもして不勝を爲さんとし、一物にても掠め取らんとす、彼が眼ざしは家の事に注意するにあらずして、隙間の有りや無きやを窺ふなり、殊勝らしく立ち働らくともあれど、妾の見へざる內は何を爲し居るや分らず、買物の時々安きとあれど出入と申し合せて妾を眩ますの策なるやも知れず、少し溫和やかにして惱を見すれば直に慣々しくして底氣味わろし、彼は余程のスレカラシと見へたり、此方にて加減せずとも彼方にて如才なく怠け居るべし、過度に追ひ廻はして初めて程好き働らきとならんとて、夜は最後に眠らせ、朝は眞先に起こし、少し居眠りにてもすれば用事なき時も特更ら手を叩く、而して此は彼の身の爲めにすると云ふなり、西洋の下婢の働らき方如何にも活潑なりと聞きて、內の下婢は何故あのやうにやと不審しみ、毫も自らに省みるとなし。

寸虫尙ほ五分の魂しひあり、況してや達辨なる世俗の大批評

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

家……下婢の眼より今の細君を見る時は、欠點の多きと素より嫌ふるに堪へざるべし。蓋し下婢の眼中にはたゞ無理非道なる我儘婦人の一大塊物を見るのみ、たへて主人と云ふものを見ず。故に常に隠れて云ふ、奥様は、私しを人間と思はざるにや、食べ物に味よきものを食はざれば氣魂の續くものにあらず、然るに奥様は旦那と常に甘きものを食べ作ら、一日何と云ひて爲さるとなし、而して旦那の前に於ては常に忙はし氣に持成し、日々大層の働らきを爲せしやうに見せらるれど、本來何事も皆私しの手にてなさぬものはなし、然るに私しにはヒジキか油揚げか澤庵の外お菜と云ふものはなく、空腹に得堪へずして偶然に御膳を食べれば、米の入用が多いとて小言たら〲なり、此の頃ひお屋敷に召使ひ私し一人とは抑そも格外の事なり、何日〲の拭き掃除にて大方た一日の仕事はあるものを、少しにても閑あれば頭はぬが拾と云ふやうに取立られ、御飯もろく〲落付きて食べたるとなし、よし何如に働らくとも十分に眠れば俯は未だしもあるに、朝は第一に起され、夜は十二時すぎに漸やく床に入り、其中奥さまは猫撫し猫も快ちよくころむ時、私しは獨り雑巾を縫はねば成らず、其上お給金の外に紙一つ買へと云つて戴たきしとは無く、此頃ろは米の價が上りしとて先月より風呂錢は私しが出すとなれり、宿も親和もなきゆへ宿下りはお願ひ申さず、切めて或る時は小遣ひ少々下され、何か買へと仰しやれば、明日よりは働らかずして居られまじきを、縁日にてもお祭りにても博覧會どやらの時でも、半日の暇まも下さるとなし、車でも時々は廻はらぬとあり馬でさへ走りづめには爲さぬ者を、私しは何故から朝から晩まで立つゞけ動きつゞけ働きつゞけて居らねば成らぬとか、必竟奥様が人遣の荒い故なり、奥様の身元は何者なりや、たゞ者にてはよもあらじ。

凡そ如此く互ひに不平なれば、怨恨日に加なりて、家政益々亂こふり、細君いよ〲癇癪を起し、下婢いよ〲亂暴を爲す。此に至れば、万事の爲し方手荒くして、器物のこわるゝとも多く、食物の屑となるとも多く、物の入用も多く、不經濟益々甚はだしかるべし、損毛之が爲めに莫大となる。必竟是れ下婢と細君との共に譏まれるに出る、左れど下婢ははした女にして家と細君に使はるべき者なれば、其使ひやうの宜からぬとに付ては先づ細君に向つて其不覺悟を責めずんばなる可らず。細君は一家の内大臣の如し、大臣は手を下して恁か〲するよりも、命令嚴肅、指揮適正にして、使ひ方

の宜しきを得るとを專要とす。能き人に使はるゝと、心得無き人に使わるゝとは、使はるゝものゝ身に取り非常の相違なり。先づ一日の爲すべきとを預じめ計定し、急ぐものは先にして、緩なるものは後にし、使ひも方角を定めて再三出歩るくの損を爲さぬやうにし、食事起伏の時間撥に定まりて用事濟めば暇まわるやうに爲す。凡そ如此くなれば、働らくものも其目途を得て、仕事を爲るにはづみあり、是々の事を爲せば則はち一日の仕事先づ畢る、其他は臨時用にして別に不定ありと定まり居らんには、不定の中ちにも一種の定りありて、下婢の心に自づから愉快を覺へ、勢々早く働らきて早く休まんとを欲するあるべし。此に於てか、万事の運び手早くして家のキマリ宜しく、下婢に幾分の餘暇を生じて、時々は手習ひするとも出來、學問は自然に人を沈着にして、いろはを習ひ了れば既に何やらん身分の重くなれる心地し、下婢の覺悟も自づからに高まるべし。

下婢の遣ひ方は、一種の藝にして、細君が學ぶべき家政學中の大切なる科目なり、其心得を講ずるは敢て易々の事にあらずと云へども、大要、前述せる趣きに據りて其方針を進むるときは、細君と下婢の間柄ら遠からずして一大變革を生じ、下婢は眞に細君の秘書官の如くなるべし。

果して此に至らば、今の細君が爲す所ろの仕事は、過半下婢の手を以て便ずるとを得べし、此に於てか、細君一層の閑暇を得て、良人を助くるの餘裕隨つて增し、細君は實に良人の爲めの他に比類なき助け手となるべし。割烹を敎ゆるとの女子敎育に欠く可らざるは勿論あり、左れど之を敎ゆるとよりも下婢の使ひ方を敎ゆるを更に大切とあす、何んとなれば若し能く下婢を使ふときは、細君は最早手づから割烹を爲すの必要に出會ふと少かるべければ也。苟くも然らず、細君一身に八人藝を覺へ、家政の万事を能く自から辨じ得るとあらんとも、若し下婢を使ふとの一大要務に練達せざるときは、細君は常に忙がはしくして自から一種の下婢と爲り下り、細君に尤とも大切ある良人に他の人が決して爲し能ふまじきの助力を爲すの暇まなきに至らん。果して然らば細君の八人藝は賢妻が能く一夫人たるの藝を遂げ得たるに比ぶべくもあらざる也。

故に下婢使ひ方の巧拙は、ホームを美にするとを得るや得ざるやに大關係を生じ、延ひて細君の大務に一と方ならぬ影響を及ぼし、遂に細君をして實に細君たらしむるか、若しくは

之を一種の下婢たらしむるかの大問題を決する要樞となるべし。因果の及ぶ所ろ決して少小にあらざる也。

九。　男女相擇ぶの標目

今の貨殖大事ね前に述ぶるが如し。左れば下婢殿どの下婢たると能はずして、細君此を得ず之が欠を補おひ、一家の良妻は辛ふじて一家の下婢となりぬ。今の所云る賢婦人なるものは、實は下婢の仕事を能く爲し、之に加へて、良人のお相手、慰さめ手たることを得たるもの、謂ひ也。左れば良人が其細君に求る所、斯の如し、細君が其理想とする所ろ、如此し、凡俗の女子教育者が女子に教ゆる所ろ、亦た如此し、滔々たる大勢相率ひて、婦人を一種の下婢となし、更に之を高等なる奴隷と爲しぬ。あゝ婦人豈に奴隷ならんや、細君あに下婢ならんや。細君は良人と同列に立ち其事業を共にする仲間なり、良人の添へものにあらずして其伴侶なり、良人のお相手にあらずして其相談者なり、其の機嫌を取るものにあらずして之を助け勵ますの同行者なり。

細君は其良人に對し、餘の何人も之に爲すことを得まじきの點に於て之を助くべし、たとひ百の家政を爲すと云ふと雖ども、若し之れ必らずしも細君を要するの事務にあらで他の餘人にても何ほ代りて之を爲し得るの事務ならんには、此事務や決して細君の爲めの最要最切なるものにあらず。細君の爲めに最も切要なる務めは、執事も、番頭も、仕立屋も、下婢も、姥も、決して爲すことを得まじきの點にあつて存する也。

故に、良人が其細君に對し第一に求る所ろのものは、先づ此點に存せざる可らず、細君が第一に覺悟する所ろの理想も、亦此點に存せざる可らず。故に男女の相擇びて婚せんとするや、亦第一此點に注意することを要す。他の婦人が得て爲し得べきの事柄は、よし他人を雇ふても辨じ得べし、細君に求むる所ろは先づ、自己の最長所を長じ、自己の最望所を贊し、自己の尤も多く要する所ろに適するの資格にあり。而して女子が其良人たらんとするものに對して注意すべき點も亦此にあり、容姿よりも、風采よりも、身分よりも、學力よりも、身代よりも、先づ自らの心尤も高く理想する所ろに適するの人なりや否や、自らの思想に對し同精神を以て助くることを得るの人なりや否や。凡そ此等を以て男女相擇ぶ箇條の第一標目となす、苟くも然らず、只だ外形により、肉に隨がひて相好む所ろを定めんには、女子は下婢たらんが爲めに婚する也、男子は下婢を雇はんが爲めに迎ふる也、亦た何んぞ之を婚姻

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

と云はん。

十。美なる内助

ビーコンスフヒールドが秘中の秘書官は其の夫人なりけり、英國三千五百万の一人にも洩さゞる極秘極密の政策は、先づ其夫人と帷幄の中に協議したるものに係はる。伯が光は夫人也、伯が力は夫人也、伯が休み所ろは夫人なりき、伯は其小説サイビルを夫人を紀念せんが爲に著作し、開巻初葉に題して云く、

余は此書を、高尚なる精神と温雅なる天質とを以て吾れ難める人に同情を表し、其の快ちよき美音を以て吾を勵まし、其の趣味と判断とを以て吾を導びき、批評家の尤とも酷なる人、然し乍ら細君中の尤も完全なる妻となりたる、吾が夫人に呈すと云へり。夫人が伯に於けるの關係察するとを得べし。此他、エドモンド、ボルク、其夫人に於る、グラッドストン氏、其夫人に於る、亦同類の美談あり。此等の夫人は政治家の夫人として實に能く妻たる内助を爲つる者也。

哲學者ジョン、スチウワート、ミル、夫人ハルリエット、ミルの墳墓をアビグノンに築き、冷かなる碑石の表てに温熱の文字を銘刻して云く、

之れジョン、スチウワート、ミルが切に親愛せる深く痛惜せる夫人ハルリエット、ミルの戀々たる紀念の爲に建立す、彼彼女の大ひなる且つ愛らしき心、彼女の高尚なる靈性、彼女の明晰なる有力なる創造力に富る廣く包容する所ろの智性は、凡そ幸にして彼女に近接したる總ての人の爲めに、智慧に於ては其導き手支へ手敎へ手となり、善良の德に於ては其摸範となりき、社會公共の善事に熱心なると共に、彼女を取廻ける、親しき人々に寛宏たり深切たり、當代の多くの大改革には到る所ろ彼女が感化の跡遺り、尙ほ末代に至る迄で其感化を遺さんとす、若し彼女の如き婦人數人にてもあらば、此世界は既に宛然天國の如なるべし、彼女を失ひて其跡に生遺る人々に、醫し難き大損失を與へ、彼女は實に千八百五十八年十一月三日、アビグノンにて死せり。

米國民政史の著者デ、トックウビル、其夫人の事を記て云く、

人よ、公等は吾妻が、困難憂愁の時に際して如何に余を助けし乎を知ざるべし、彼女は平生温柔の質なり、左れど斯る時には非常に強く熱心となり、吾の知ぬ間に、吾に氣付け、吾を和らめ、靜め、強くしたり、この時、もし彼女なかつせば、吾は夙とに其の困難の中に、摧け倒れたるなる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

べし。

ゼナベの博物學者ヒウベル、盲しひにして微光をも見ず、然るに彼が能く驚ろくべきの研究を爲し、蜂の性質に就きて不世出の新説を發揮したるは、何に由る乎。必竟是れ其の夫人の内助ありしが爲め也、彼女は良人に代りて觀察し、良人に代りて試驗し、之が爲め怠らず倦まず疲れざる非常の勉強なる觀察者となれり。左ればヒウベルは言へり、

彼女ありし間だ、余は余の盲目なるとを覺へざりき、と。

嗚呼此等は、哲學者たり、學術者たる人の賢夫人が爲せる眞誠の内助なり。

其他改革者ルーテルが其夫人に於ける、文學者クロート、レーレル等が其夫人に於ける、或は商業家、或は教育家、或は武官商人等の古今に著名なる人物が其各夫人に於ける、皆な其の眞實なる温然なる高潔なる内助を受け、初めて其大名を成し得たるにあらざるもの鮮なし。妻君内助の高きと卑くきと、清きと汚らはしきと、強きと弱きと、眞實なると浮華なるとは、或は英雄を殺ろし、英雄を生かし、或は豪傑を生み、豪傑を葬むる。此に於てか世上活演劇の役者は皆な其舞台の後ろに大教師を有し、之が一顰一笑一動一使によりて或は盜賊となり、君子となり、奴となり、大公達となる。内助の辨謹みて辨ぜずんばある可らず。

（大尾）。

汝ち妻を愛すべし、妻は汝の中身なり、
人自から其身を惡むものはあるまじ。

雜録

内助の功益

中島俊子

多年虎の子の如く貯へし金錢も消費して、惜し氣なきものゝ如きは、即ち今回の選擧騷ぎなりき。議員中二三名を除くの外は勝敗何れの軍を問はず、候補の中に加へられし者の消費高、素より多少の差はあれど、今や金錢を惜しむの場合にあらず、この場合に際遇して儉約主義などゝは丈夫の所爲ならずとの意氣込は、同一轍なりき。その中尤とも多く費やせしものは、實して三四千圓に達せりとか。おのが平素蓄ふところの識見お、のが取るところの主義等を、選擧者に吐露せん爲には、演說會も要するならん、懇親會も要するならん、選擧區巡回數も亦要するならん、これ等の消費元より程度はあらざるべけれども、たとひ數回自から辨ずるとも費用蓋し推量し得らるべし。然るに其不節しきは、この大金の消費道なり。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

人々も疑團の結ばれしものにや、早くも無遠慮に放言すらく、鰹魚節廳に騰貴するあるべし、呉服店利潤多かるべし、その他何某は召喚狀を發せられたり、何某は遂に告發せられたりなど、これらの中には謠言も多かるべし、左れど、またやゝ實に近きものもあるなるべし。名譽を重ずる帝國の人士にして、爭でかくの如き卑しき所行あるべきや。若しも不幸にしてこれを謠言あらずとせんか、其人士は蓋し謂はるべし、賄賂云々、固より丈夫の恥るところたるは、萬々承知せり、然れども、吾輩は我國民に對して、有益なる思想を有するものなり、吾輩出ずんば將た此國民を如何せん、吾輩の出るは吾輩の爲に非ずして即ち國民の爲如何なる惡手段を爲すとも議場に出なば前過忽ち償ふべければ、言論以て他人を傷つけんなどは、抑も手緩るし、時にとつてはピストル、竹槍を要する事もあらん、賄賂恐るゝところに非ず、財産(議員資格)を傷つくに非ざる以上は、敢て吝しむところに非ず、これらの用に立てばこそ祖先も地下に瞑すべけれなど云はんずる有樣に見うけられたり。前途こそ正しければ、初歩は如何程不正にてもよろしとは、妹の甚解せざるところなり。第一、初歩の不正は、百武の後尚不正の痕をとゞむればなり。今回の賄賂沙汰は、世間も隨分やかましきものと見へ、撰擧法改正論中、一縣を以て一撰擧區と爲すの論の如きは、賄賂弊を醫せんとするの一手段ならん、その論者の如く爲さば、今日に比して賄賂の弊大に減るなるべし。こは法律を以て惡弊を醫するなれど、法律外にこれ等を醫するの道をも講じたきものなり。他にあらず、即一家の妻君、心よりこれらの不正卑劣を惡むにあるなり。人間外の無頓着者は言外なれど、普通の男子たるものは、幾分か妻の尤も好むをこのみ、惡むをにくむものあり。たとひ全く其好惡共にせざると雖も、妻が全力を擧げて不同意を表するときには、夫婿聊か躊躇するなるべし。この躊躇度重なつて、終には跡を絶つにいたる。若内助者ある妻君にして、不正の所爲を痛く惡むものとせば、夫婿千辛萬苦の後、やうやく勝を占むるも内に誇るべきの勇氣なかるべし。賄賂を受くるところの人も、家内に對して面目なしと思ひたれば、身邊に現はれんずる手も、何となくひかるゝ心地するならん。是に於て、内助の功益暗々中に在て、法律も條例も及ばざる特種の功能を有するものならんと信ず。諸姉以て如何とす。

附言す、今回改正の集會條例中、更に女子が政談演説會に立入るを禁じたり。されど女子が政談演説會に入らざれば政事を聞く能はざるか一國に施行せらるゝ政治法律をしら

んと欲するは、單に浮淘、流行物ずきより來るものに非ずして、必用より來るものならん。必用より來るものは、條何門て能く形體を束縛し得るも、獨如何せん、進歩しつゝある女子が腦味噌を一掘し去る能はざるぞ。

召使ひ扱かひ方何如にやと、主婦の方々に問ひまゐらす。

万國婦人禁酒會頭　カイラード女史

孔子、ソクラテスなどは、問ひかけて人を困しめ、困しめて其人を導びきしともかりし由、左の七つの問ひかたもこれに似たり。

近頃の統計表に依り候へば、合衆國に於る下婢の數は、百萬に達し候よし。かく夥多き婦人の幸福如何んは、偏へに之を用ひかる家族の親切なると然らざるとに因る所とおもひ候へば、そを用ひ玉ふ方々に對し、左の問どもを發する事、衷心、止みがたく相成候。

一。方々には、下婢の朝夕の挨拶に對し、懇切に應答し玉ふよ御心懸候や。

二。暫らく家を離れ居りし下婢の歸り來れる時、快よく之を迎へ玉ふと御座候や。

三。客來ある時、下婢の室に入來れる折、「是は私方に雇有る何々にて候、よく一家の幸福を補けくれ候ものに候」とか、何とか、紹介し玉ふこと御座候や。

四。日曜日には仕事を輕くし、食事もなる可く略にし、教會の集會に行得る樣、都合し玉ふ御方、幾人御座候や。

五。溫良なる基督教徒にして、雇女を見ると手飼の犬猫にも劣り、木片又は機械の如く、一言の挨拶だに惠みたまはぬ御方多きは何故ならん、御承知御座候や。

六。雇女を指して、召使と申すとなるが、固より人につかへ候とて、何も卑賤とを爲す譯ならず、正々堂々の職分を盡し候ものなるを、何故か召使と申す言葉は移りて卑劣なる意味を含み候樣相成候へば、此後、召使と申す言葉を廢して手傳とか、助けとか、申候ひては如何ん、御相談申上候。

七。家族同樣にして夜の祈禱を爲し玉ふ時、下婢をも召寄せ、均しく侍らせ玉ふや。若し又平常好からぬ氣質あるか、不躾の所業、有之候はゞ、祈禱の折に是等を改め得る樣、祈つて御導しありては如何。若し理由を說得ぬものならば、深切に教へ導びき玉ふとは出來まじきや。時々女部屋を見廻りて、疊布團なども有る可く清潔にし、起伏しの快よく出來る樣注意し玉ふとは出來まじくや。雇女の得意にいたし、料理の

味よく出來候折、又は菓子類の燒方抔好き時、一言賞め詞を惠みたまふては如何、自身に盡力せし者を、人の認めてくれ候ば、此上もなく嬉敷ことにて、下々の者の情も何とて之と違ひ侍らん、折々の賞め言葉は、こよなき勵しと相成しと、お互に忘れぬ樣いたし度し。況して、一家の衛生に係る庖厨の主事たる者の職分は、いと重く候て、時としては、主婦たる者の及ぶ處ならざることを思へば、忽がせにいたす可きことならんや。妹が時々音れ候家族の食前の祝禱の中に、「此食物を調理せしものをも祝し玉へ」との一言は、大に妹の心情を動かし候ひき。人に對して些細なることに慇懃丁寧なるは、如何に爲し易く、又如何に忘れ易きことに候ぞ。悪事を爲す者は故更に起るよりは寧ろ怠慢に起るもの多しと信じ候へば、畧言を呈し、自身にも心得を新たにし、方々へも聊さか御言添いたし候。

消夏錄（其一）

雲峯生

○鎌倉行

都の熱天湯地を逃れ、或は大山雲深き所に三伏の暑氣を消し、或は海邊風涼しき地に九夏の炎苦を拂ふ、是都人士年中の樂事にして平居の勞疲を養ふの策なりとす。人のなすてふ消夏策余も亦して見んとて思ふ友打つれて或日都の空を立出て、鎌倉に向ふ。此處にかりの宿りを求め暫らく止らんとす。名にしおふ古跡名所とて見るもの繁く、思ふ事多し、されど歴史に係はる事、山河の形勢に至りては世の人のよく知る所、長々しくものせんもやくなし。余は或は古跡舊址をたづね、山河の風景を觀て思ふふし〳〵を簡短にものすべし。

○由井が濱

余の宿の東に由井が濱あり、日毎に行て海水に浴す、波滿く、風涼し、東に立ち並ぶ山々蜒々たり、屏風山とぞ聞く。拙なくも三十一もじを綴りぬ、こはまた歌ならじと云つゝかきつく、

こし方を屏風の山やへだつらん
都の空も見えずぞありける

南に連なれる海茫々たり、波上遥かに伊豆の大島見ゆ。

○海邊夜半の景

海夫の漁火かげ消えて、東村西落凡て寂寥、夜半宿を出て、由井が海邊に至る、蛾眉半輪の月屏風山をはなれ、水心に浮ぶ、波靜に動きて涼風徐ろに至る。はや秋立つ日も近くなりけんと思ひてかくなん。

さやかにも夜半の月かげうつりけり
ゆゐのうら波秋や知るらん

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

漕ぎたひして行く十二丁計りにて昔榮えし鎌倉の跡趾に近づきぬ。夜更けたりければ何も見えず、山巓かすかにあらはれ、村落ほのかに見ゆるのみ。天下の美を集め、四海の秀を合せ、金銀光り、錦繡輝きし昔の夢、消えて淋しくなりにけり。高名富貴若し長くあらば水高きに向つて流れんと、古人の云へるぞ理りなる。獨り思ひつゞくる折しも、海風一陣、濱邊の古松を吹く、亦一首を口ずさみつゝ歸る。

星づく夜今は更けにし鎌倉の
　　松の音のみむかしなるらん

○靈山に昇る

夕日既に落ち、晩涼風と共に生ずる時小高き山に昇りぬ。四邊遠く見え、天地も俄かに廣くなりし心地しけり。平日は砂閑々たり杯賑しく思ひける都も疎ろになつかしくあり、打ながめられぬ、

遠近の山も隔てずなりにけり
　　都の空を見るぞうれしき

近く臨めば由井が濱脚下にあり、波靜かに聲てゝ鎌倉一圓眼中にすべし。いとうるはしきかなとて思とち語らふ内、漸く黄昏ならんとす、山を下らんとて亦よみ出でぬ、

秋されば夕淋しくくるゝ哉
　　ゆゐのうら波かまくらの山

カーライル夫人獨語

文醜子

余の父上は甚く男子を渇望し居られたり、父上は余が女子に生れしを失望せられし、然ども父上は成べき丈男子の如くに余をば養育せられし、余は男子の如くに躾られたり、母上かつてこれを諫め給ひし時、父上の云ひたまひけるは「己が娘十八歳になりぬれば、己れ渠を御身の手に渡さむ、かくて御身は娘の心得べき事を何かと教へやれよ」。さり乍らカーライル來りて、この事みな忘れられたりき、余が結婚せし當時は能く拉典の文を綴りしも、釦をかける術をば知らざりし。結婚后カーライルは余を人里離れし片田舍の農家へ携へ行けり、若者をしめ、見苦な脛を露はせる黒女は始終余等を接待し呉れたり。ある日この女、異樣なる禮義にて絲を卷きつゝ余に云ひけるは「今日は市日に候ふ、妾只今市場へ參り候ふが、如何なる食物をば求め候べき」、折しも余は讀書の外に餘念なかりし「オゝ、何にてもそなたの好むものを」これ余の答ありし、「否とよ、御寮、妾の好むものに候はず御前の御意に適ふも

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

のは」、さて食物はやう〳〵決定せしものゝ、嫌ひなどは其料理なりし、毎日毎日余等の食事は食ふに食はれぬ不加減ものゝみなりし、夫カーライルもついに堪り兼しと見え、余に向つて云けるやう「わが愛妻よ、自分は哲學者にはあれど、せめて食事には鹽梅よく料理の出來たる精肉を食はねばならぬなり」、余はこれを聞て非常に悲しかりし。やがて料理法獨案内一冊を購ひ、皿鉢類と伍をなして自ら一室に閉籠りしかば、ついには日用料理法の大意に通じたり。裁縫の稽古もこの通りにて爲したりき。カーライル遠國に旅立せり、余は彼のために一つの短胴服を拵へしが、見事に出來上りてなか〳〵能く似合たり。余はいたくこれを誇りぬ、カーライル云けるやう「御身は一枚の短胴服のために褒美を願るも、これ位は女たるものゝせねばならぬ仕事なり、御身が自分の職分を盡したりとて、何も褒美を願ふには及ぶまじ」。とはいへ余は褒られんとを願ひしなり。余今日にては麵包を爛き、食事を調理し、各種の襯衣を裁縫し能ふが故に幸なり、(カーライル夫人の自叙に係る)

經濟の秘訣

山下石[illegible]

勘定を細かにし、經濟を能く調ふるは、至極大切なる事にて、啻に金錢の爲めのみにあらず、樣々の事に影響して一身に益を及ぼすと至つて多きものなり。經濟亂雜なれば、自然何事にも亂雜となり、万事鬪魯にして取締りなく、人よりは信用せられず、自身も自身の事を確かに知らず、漂々泛々として水の上の草の如く、風の前の木の葉の如く、たゞ浮れ淫れて遂に行く所ろを失ふ、實に悲しきとにあらずや。

われ太たく此事を憂ひとし、躬から深く之を愼しみ、元來經濟に無頓着なりし惡習を、漸やくにして改ためたり、依て其の改ため方を言はんには、先づ預算を作るより優ることなし、預算を作るとを知らねば到底經濟は治まらぬものなり。

預算とは一と月、又は一と年の間に受取るべき入金を若干と預じめ勘定し、之に相應して何々に對する入費何程と切盛をつけ置き、之を標準として、實際の使ひ拂ひを爲し、「入を計て出を制す」との確言を、寤寐にも忘るまじきの義也。

其方、先づ翌月の入金五拾圓とせば、屋賃何程、食料何程、子供敎育費何程、小使何程、雜費何程、器具費何程、臨時費何程と云ふ如く、便利に隨ひて出費の項目を分ち、夫々の使ひ高を定め

置くなり。斯て日々の出金を一々部類分にして、今日は食料に何程、雜費に何程使ひたれば、夫々の部に於て最早殘りは何程となれり、又何々の口は預算よりも多く入りたり、夫ゆへ何々の口を儉約して之を償はんと云へる趣むきに取斗らふ時は、毎日〲其貯金の高、及び今後何に向つて使ふべきやの目的明らかに分り居りて、心中常に心得を存し、覺悟自づから習慣となり、隨分何となくシヤンとしまりて、至つて心地よくなるもの也。

斯くなれば、儉約の念自然に湧き出て、預算の高より一錢にても多く殘するやうにせんと思ふ心の起るものなり、而して一錢にても儉約し得たる時の喜こびは、譬へば情慾を制し得たるかの如く、もしくは邪念を禁じ得たるかの如く、又は一の善事を經營したるかの如くに感ぜられ、其愉快形容しがたし。人は自由我儘に遊びくらすを樂しきと思へど、種苗を調へ、不用を節し、快ちよく金を貯へて扨て之を將來に用ゆるほど愉快なるとは恐らく稀れなり。此等の經驗は先づ自から試みたるの後ならでは、十分に分らぬものなり。

故に余は其大樂を得るの第一着歩として、先づ預算を爲す可きことを強く勸告す、預算なき家に金の溜まることなし。

豆腐を棄つ

井上次郎

午過る頃ろ、或家に客ありけり。主人豆腐一丁買ひに遣り、其半ばを割て汁となし、半ばを棄てたり。娘之を視て奇しみ傍はらより其故を問へば、主人の云く、我等はすでに晝飯を畢り、夜食の菜もすでに調へたり、然るに今又た豆腐半丁を余計に料理せんとすれば、醤油も入り、薪も入り、其上一品多く食べるとに慣れて、多少明日の奢りの種となるべし、半丁を棄つるは惜しけれど、之を使ひて余計のものを作るの入費は更に惜しゝ、故に之を棄つと。

或人云く、何故其時同時に煮ては置かざりしやと。答へて云く、然せんとすれば矢張り過分の汁を作らざるを得ず。若し又其客に悉とく出せば、多すぎて反つて味を減すべし、客を待するの好意にあらず。

又問ふて云く、此は夢想兵衛中の、鰹節を棄る寂仁に似たり、寧ろ貪吝にては無きやと。答へて云く、彼は平素香の物のみを食ひ居り、美味を食べれば御飯が余計に入ると云ひて棄てたるなり、明らかに吝嗇の氣あり、此に記したるとは少しく違ふ所ろあり。

此の事實談にして、確かに其人あり、感ずべき心掛なれば、

一六

人の倣はんことを祈る。

山林の遊客

天知子

熱塵風を殺して火氣を吐き忌はしき病ひ毒氣を吹きて凄まじ、此時都人逃れて山林に遊ぶ者多からん。箱根、熱海、日光、鹽原、鎌倉、伊香保、霧積等に往く者皆山林に往くなり。見よ潺々と叫んで涼風を叱するの谷川も、颯々と冷笑ふて山氣を弄するのすゞ風も、病虫を驅て新しき空氣を漂はしむるの新界も、皆之れ山林のものあらぬはなし。此谷川の掬すべきを見る者宜しく山林の一葉が粒々受け得たる又造り得たるの雨露の集りあるを觀るべし、此涼風の能く膚を嬉しくする事を謝する者は宜しく山林の亭々たる樹冠が日光を遮り水氣を涸れしめず空氣を涼やかにし又循環するものある事を觀るべし、此新しき空氣を賞翫するの者あらば宜しく山林の樹木がヲーゾンの分子を作りて之れを淸め毒虫を殺す者たる事を觀るべし、禽の囀き、魚の睡み、蛙の聲、草虫の吟、又之れ山林の惠たるを觀るべし。山高きが故に宜しきにあらず木あるを以て尊ぶなり、人は山林を物質的の冷眼にて見る事を知りて未だ其の生命を觀る者少し、後來日本の經濟は此山林にある事を覺へて尊敬せよ、生命幾千萬を養ふものは一に此山林にある事を覺へて頭を叩けよ。獨乙の山林濕霧盈る、國民の生命安く國家の經濟豊かなり。若し人深き林中に立て更に自然に交るを得ば、氣高く心潔く俗耳を洗ひ俗眼を拂を得ん。昔し赤松子俗務を止て飄然山林に遊ぬ、支那の人言けらく、山林は仙の住む所なりと。都人常に俗夢に醉へり、今日山林に遊ぶ人宜しく觀察の眼を拭ふて、且夫れ自然に歸を得よ。

深夜の星

かすみ

○前途を見よ

營々として利に狂奔し、眼を永世に着することとなし、朝たに算盤を握り、夕べに埋れを苦慮し、念頭絶へて俗世の上に出でず、汝ち抑そも何れの日に汝ちが命運を思料せんとする乎、西行の歌に、

いつ歎きいつ思ふべきことなれば、
后の世しらで人の過ぐらん。

○請放任せよ

總躰世の中の事は、如何ほど賢しこくても、人の智慧工夫には及びがたきものなれば、たやすく新法は行ふべきにあ

らず、總べての事たゞ時世のもやうに背かず、先規の有來りたるかたを守りて之を治むれば、たとひ少々の弊は有ても大ひなる失はなきものあり、何事も久しく馴れ來りたる事は、少々悪しき所ろありても世人の安んずるものなり、新たに始むる事は善き所あつても人の安んぜざるものなれば、成るべき丈け舊によりて改ためざるが國政の肝要なりと。本居宣長、其玉くしげに論じ置たり、今の政治家とか云ふ人何如に心得らるゝものにや。

○彼の唄ひ女

謠曲、江口に云ふ、十二因緣の流轉は車の庭に廻るがごとく、鳥の林に遊ぶに似たり、前生又前生あつて生々のさきを知らず、來世猶來世、更に世々の終をわきまふことなし、或は人中天上の善果を受くと云へども、顚倒迷忘して未だ解脫の種を植ず、或は三途八難の悪趣に墜し、苦患にさへられて隨緣心の中たちを失ふ、然るに我等適ま受けがたき人身を受たりと云へども、罪業深き身と生れ、殊に例し少なき川竹の流の女となる、前の世の報、思はざることぞ悲しけれ、紅花の春の朝、紅錦繡の山粧ひを爲すと見えしも、多くの風に誘れ、黃葉の秋の夕べ、黃纐纈の林色をふくむと云へども、朝の霜にうつろふ、松風蘿月にこと葉をかはす、賓客去つて來ることもなく、翠帳紅閨に枕を對し、いもせもいつの間にかは隔つらん、心なき草木情ある人倫いづれ哀を逃るべき、斯くは思ひ知りながら或時は色にのみ、貪着の思ひ淺からず、又或時は聲を聞、愛執の心いと深き、心に思ひ口にいふ、妄染の縁となる物を、實にや皆人は六塵の垢に迷ひ六根の罪をつくる、見る事聞事に迷ふ心なるべし、實相無漏の大海に五塵六慾の風吹ねども、隨緣眞如の波のたゝぬ日もなし、たゝぬ日もなし、波の立居も何故ぞ、假ある宿に心とむるゆへ、心とめずば浮世もあらじ。

○ふか夜の星

何故に深夜の星と云へるかと問へる人あり。夜深けて天を見よ。黑暗々より黑ろく引渡り、白銀の錢を以て打とめたり、暗き中に光りあるは只だ之のみ、而も月の稜かなる光もあらず、小さけれど最と燦らゝかに天の榮光を洩らす也、一天白々なるよりも、そゞろに一層の嚴そかなる心地し、大海原に眞珠を拾ろひ、林の蔭に玉を見出し、豪傑の爛たる眼こそを見て其心の底を測るよりも趣あり。

小松崎古登女を訪ふ（其三）

生野ふみ

女子が武術を習ふの得失如何

と問ひたるに仝女のいはるゝやう妾は女子が武術を學ぶことは誠に國家の爲に喜ぶべきの事にて又女子其本人の身にとりても誠に必要ある事と思へり。全躰今日の若き人は、十に八九腦病とか肺病とかいふ忌はしき病氣に罹らぬものはなく可惜壯年の時期を褥の内に送る人の最と多きは實に歎かはしき事なり。妾は常に此事を憂へ侍る若し此儘にして幾年を過る時は日本國民の半以上は皆病人のみなるを以て一朝國に事あるの時も起て働らく者はなきに至るべし妾は此事を思ふ毎に實に一日も安んじ居り難き樣に思はる。是といふも畢竟は是迄の婦人の躰育が足らぬ故其柔弱なる母によりて生るゝ子が病身となる譯あれば將來の國民を壯健なる人となさんには是非とも今日の婦人を充分に丈夫なる者となし置ねばならぬと思へり。而して又其婦人の躰育に最も適するものといへば薙刀術なるを以て妾は武術の中に於ても薙刀術をこそ一般の女子に習はせ度とおもふなり。然れ共妾が薙刀術の教授をなすの身分あるを以て此事をいふ時は自ら己れの藝を賣り付ける樣に聞ゆるを以て今日まで默し居たりしが衷心には終始此事を冀ひ居るを以て機もあらばと思ひ居たるに幸ひ近頃女子に薙刀術を學ばする事の實益あるを覺るの人あり既に明治女學校などは此事を科目の一部分に加へ居らるゝよし蔭ながら誠に結搆なる事と喜び居れり妾は斯く信し居りしを以て未だ女子が武術を學びて何等の失あるを知らず寧ろ恐らくは失てふものなかるべしと迄に思ふなりと。次に妹は、

薙刀術と躰操との比較優劣如何

と問ひたるに仝女いはく其は單に躰育といふ趣意より申せば別段違ひもなかるべしと存ずれ共仝じくならば薙刀術を躰操の代りに致す方が餘程宜しかるべしと思はる。なぜなれば薙刀術を學ぶ時は運動にもなり且護身の具ともなるを以て啻に躰を丈夫にするのみならず又胆力をも養ふ事が出來一擧兩得の策となるべし。躰操は只躰操にて止まんのみ故に妾は躰操を爲す位ならばいつそ一步を進めて薙刀術を爲す方宜しからむと思ひ侍る。仝女は又妹が、

くさり鎌と薙刀と劍との比較

てふ問に對して答ふらく、かゝる事は少しにても此道の事を辨へ候人あれば大ひに話しも分り易けれど貴嬢は未だ此道

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に入り給はずとあれば只あらまし御談し申さんに、實は薙刀といふものはありとあらゆる武器の中にて一番得のあるものも。其はいしづきが利く故に力を用うること少なくして敵を仆ます事多きゆえなり。くさり鎌は之れに異なりて餘程熟錬したるものにあらねば容易く遣へぬもの也、其はくさりの振り方によりては、自分の鎌で自分の頸を纒ふ事などあれば、下手な間に中々に用うまじきものなり。劍に至りては鎖り鎌ほど困難にはあらねど迚ても薙刀には及ばぬなり。迚は妾が專ら薙刀術を學びたるからとて申にはあらず妾の流義にては薙刀術の中にくさり鎌をも劍をも含み居るを以て妾にとりては何れを揚げ何れを抑ゆるといふ事はあらず即ち薙刀術の講習を表裏奥の三段に分ち最初は薙刀のみを學び裏に入ればくさり鎌あり奥は九寸五分を用ひて敵を防ぐの法なり。故に妾の流義にて薙刀術を全く終る時は劍を學ばぬも自ら劍術を會得しくさり鎌をも遣ひ得る事とあるあり然れ共是れを一ッ一ッに分つ時は薙刀こそ第一に利益ある武器と思はるとて尚ほ一二の例を擧げて薙刀の利を說かれたり。

きよめぬ庭

十種香　其二十

洒落齋主人

後小松院の宸翰に、薫物の方と云へる書ありて、四季おり／＼にくゆらす薫物の方さま／＼擧げたるに、梅花と云へるは春の梅の香に通ひ、落葉と云へるは紅葉散る秋の心に倣らへ、冬は菊花、あるは黑方のふかく冴へたるに、淺からぬ香あり、侍從は秋風蕭索として心にくきおりにくゆらすめれ。されば十種香の道など云ふことあり、此は何時の頃より始りたるにや、さだかならねども、古は女子の一藝としてもてはやされぬ、實に高尚優美の技藝とこそ云ふ可けれ。香の道と云ふこと、我國のみのわざにはあらず、唐國にも香志、香錄、香譜、名香譜など云ふ書どもさえ見えたり。十炷の煙說可くもあらず、宇治山の邊に、小草かきわけて造りかけたる庵に古今御幸の御事にはあらずも、新月山の端にすがたをあらわすとき、星逢の空に郭公の啼音さびし。花と月その名所に雪消の間より咲初たる紅と白の梅花、我國にては源平の島合、唐國にては呉越の花軍、となりし硯に訪ひ来し雲の初音ゆかし。對の香爐にひとり（火取）むかう（焚香）も

おかしけれど、かたえにをりする（折居）たる香爐にのせたるくさ／＼のもの、香箸、灰押、限夾、香箒、鶯、符匣、小筥、符筒、香裹、香盒、そのほか琅葉匣には琅葉をいれたる、火箸瓶には火箸たて、記録紙、名紙はものかは、炷燼壺、かたちの曲りたるに似もやらぬ香匙、あるは平なる琅盤などを、今日の圓居の友となし、いざ火味もよきほどに、焼合十炷などせんか、忍ぶ香のいつか洩れけん、四町あまりかなたより、人の尋ね來しもいと優なる。いざ此方にて語はん、三の夕はすぎぬとも、香の系圖に六義を紊し、あるは伊勢源氏競馬の巻、あるは闘鶏蹴鞠の事など、語らふことも盡なくに、東の方の白みて、小鳥さえずるに、や（矢）聲の鳥の數いつしかにまして、はや夜はほの〴〵と明けわたれば、客は歸りぬ。人のこゝろはおろかなる物かな、にほひ（、容色）などは假りのものなるに、しばらく衣裳にたきものすとしりながら、えならぬにほひには、必ずこゝろをきめきするものなり、と兼好が徒然草に教誨をのこして、人々にかりの色香に迷はざらんことをすゝめたり。花の紅なるとき、柳の緑なるときは、人の目をよろこばすものから、あな美しの花や、いとうるわしの柳や、と愛るなるべし。されど或る夕あらしのふきて、昨日迄も人の目をかけにし花の、殘りなく吹き散らされたらましかば、再度かへり見る人もあらじ。妹の裙さむき霜の朝となりて、今に至るまでも緑の髮を梳りし柳の葉の、乾葉の如くなりたらんには、指さす者さえあらずなりぬべし。女子と生れしもの容色の美らかなるにつけ、自ら先づ巳を戀ひて、我國廣しと雖、わなみに續く手弱女はあらじ、揚貴妃が花の眼、李夫人が蓮の睫、白樂天の愛し春草のすがた、呉夫差の心を傾けし西施の面かげ、何れかわなみに及ばん、など云へるうちに月日のすぎ行きて、いつしか失せし色と香。おもかげのかわらでとしの或はうきくさの根をたえての歌は、小町さえ詠じけめ、

何由鑄入青銅内　不遣秋霜換蛾翠

とは高青邱が美人の鏡に對せる圖に、題せし韻なり。力山を抜き、海を反へす智あり、滴のしたゝり來たりなば、ライデンフロスト氏の云へるフェノメーンの規則によりて、はねかへりなんばかりに少きときは、琴を焼き鶴を煮てもて、こゝろよしとなせし俊傑も、麒麟も老いては駑馬に劣り、鸞鳳も窮すれば蟻蜋の爲に苦しめらるに至りて、始めて目のさむるもあるべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

されば始よりかりなるいろ、浮たる香りなどはたのまず、ひたすら實の道につき、業を以てたちたらんには、のちにありなるにほひ、浮たるかげのさり行くもなにかはせん。常盤木のたえぬ縁の、呉竹の千代經るもかわらざらんは、いとかたき業なれ、と云ふものも、ひたすら人の前にすゝみて、人の爲しがたきほどのことをつとめてなしたらんには、その得がたきことども、得るのよすがなからましかは。

香の舍の主人、明る朝より雨の降り來ぬるを、かへりてひとしき優しきにほひすとて、逍遙紅鹿三吉野など云へる薫物出して獨りたのしみ居たるに。開田琴梨と云へる人の訪ね來たれり、こはよきおりにこそ來られけれ、先のほど或者の此の木どももとめてよと送り來したれば、しきりにきゝ見たるに、此方なるは何さすぎ、此方なるはからすぎるやうおぼゆ。いづれにせんかとて、惑ひ居たるおりなれば、幸のこと御身一度きゝ給ひて、そを判じてたび給へ、と云ふに、開田は此まで、香などきゝたることなけれど、やりてみんとて。されば出しみられよ、いかにもきゝ別き申さんとて、香爐をひきとりつ、先のほど主人の爲したる如く、鼻のもとにもち行き、手をかざしたるが、あさきの、からきのと云ふをきけば、此はねぶりてみるものならんと思ひて、舌を出してちよとねぶりけるに、舌のさき火にわたりければ、チッと云ふ音さえ聞えぬ、あはたゞしく香爐をさしをきて、口をかゝへ居たり、主人はいとおかしけれど、

主　あなたはなんとおきゝなされましたナ。

客　イヤハヤ、私も此までいろ〳〵の木もきいて見ましたが、こんなあつい木は此度が始めてゞ御坐るテ。

批評

女學子、小說「うき世」の後に一文を草せんとす。未だ成らざるに香君すでに左の一章を投寄せらる。惟に蓋し人は自ら知るの優れるに若かずと、則はち先づ之を揭げて拙評に易ゆと云爾。

小說「うき世」の後に書す

かほる

回顧すれば余が此篇を始めしは五月末つかたにてありき、日移り、月變はり、號を重ぬる十二、貴重の紙面を汚し、讀者の清閑を煩はせし事誠に謝するに辭なし、余や未だ青面の一學生のみ、識薄く、才乏し、書を讀む事博からず、嘗て小說を讀みぬ、而て未だ小說の何たるを知らず、されど常に思ひぬ小說は貴重の文學なるべしと、然るに我國に於ては小說を亂作するもの出で、遊戲半ばに筆を下す徒甚だ多かり、是半文小說の多く現はれし所以なるべし、人をして今日は文學の極衰せる時代なりと慨嘆せしめたるも偶然ならず、文學と云はゞ其意義甚だ博し、小說のみを見て文學の全般を評し去るは當らずと云ふべし、されど今日迄我國に最も流行せしものは小說にして他の詩文に至つては殆んど見るものなし、故に若盛に行はるゝ所の小說にして進歩するなくば素より文學は衰運に屬すと云はんも理なきに非ず、凡ての文學悉く發達進歩せん事は余の只管希望する所なれども是甚だ難き事なるべし、希世の文豪出で、絕世の大家起らずんば容易に進達すまじ若余輩の進歩望むべからずと云はば責めては今日流行する小說をして多少の發達を爲さしめたし、之を發達せしむる即ち如何にせば可なるべき、余は信ず世の小說家たるものが誠心赤意以て筆を採り、眞面目の著作を爲すにある事を、思ふに我國古來の小說家多くは輕躁浮薄の筆を弄して、遊戲嘲笑の文を作したるが故に小說なるものは、他の文章と異り、諷嘲笑罵の躰を備へずんばあるべからずと世の人識認せしならん故に世に出てし幾多の小說中眞面目の作あるなし、只讀者をして一時の快樂を得せしむるのみ、若夫れ長く存し、久しく人を樂ましめんとならば必らず眞面目の著作ならざるべからず、リッチヤードソン嘗て傑作の小說二篇を出す、歐洲諸國の人之を愛讀する事限なし、英京の紙價爲めに騰るばかりなりき、而して其世教人心に益せし事少なからずと云ふ、今其著筆の原因を聞くに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一日書肆彼を訪ふて下等社會に有益の讀物をものせよと乞ひぬ、彼曰く「下等人民をして平常如何なる思想を有し如何なる行爲を爲すべきやを知らしめん爲めものする所あるべし、果して世人を益すべきや否や」と、是即ち名篇の作りし原因なりとす、或人之を評して大部の説教集にも勝りて人を益すと云へり、世道を補ひたりし事知るべし、世の小説家すべて斯る心もて筆を下さばよき小説の出るに庶幾からん。

人或は云ふ小説は必らずしも勸善懲惡を目的とせずと、或は然らん、されど若し少しも世道人心を益する所なくんば小説の用途に何處にかある、余は世に無用無益のもの存するなきを望む、豈目的なきの小説の出づるを希はんや、若小説にして眞に世道を益せば人自ら之を敬重すべし、人の敬重する所必らず貴き價値なくんばあらず、眞に價値あるに至つて始めて眞正の小説と云ふべし、余は我國に速く斯る小説の出でん事を望むものなり。

余が小説に對して思ふ所の大略斯の如し、されど是云ふに易くして實際になす事難し、余が始めの目的は余の意思を達するにありき、而して遂に達する能はず、空しく勞し、益する所なし、遷延數ヶ月の紙面を汚せしぞ面目なき。

不學を顧みず、拙なき作を爲せしにも係らず、愛讀せられし人々に深謝す、殊に書簡を以て或は口舌を以て種々云ひこされし多愛の人に熱情もて謝す、諸君の堪忍強き長々しきをも厭ひ玉はず、剩へ種々懇切の言を賜ひしは余が肝に記して忘れざる所なり、されど余は今少しく辨ぜざるを得ざるものあり、何ぞや、即ち諸君の内に或は余のものせし所を見て誤想せられし人あるを恐るればなり。

余が始め筆を着くるや趣向の確定せるものなく、文体の撰ぶ所なかりき、毎週雜誌の編輯期日に當り、頓に筆を下して咄嗟の間に稿を作しぬ、素より趣向を考へ、文章を練るの暇なかりし、されば叙し去つて如何なる人物を畫き、如何なる趣向を立てしやを知らず、思ふに讀者諸君亦然らん。

「うき世」未だ完結せざるに先だち懇切の言を玉はりし諸君に數種あり、或人は悲慘讀むに堪へず、故に速かに中止すべしと云ひぬ、或人は曰く是必らずや小説ならじ作者の實傳なるべし、作者の不幸眞に憐れむべし、同情もて慰めん云々と、亦他の人は云ひけらく余が叙する所慘狀悲哀のみ、是畢竟世のダークサイド(悲慘の狀)のみを見てブライトサイド(快樂の樣)を知らざるに坐するの過ちなり、悲慘の狀を畫くと共に快樂の樣を寫さざる可からずと、亦云へるあり是繼母に向つて恩誼を述るに過ぎず、世に繼母なるもの多し、強ち余が記する所の如くならず然るに其最も慘酷なるを叙するは宜しからずと、其他幾多の讀者が云ひこされし所恐く此に記するを得ず、上に云へる所は其主もなるものにして余が少しく辨ぜんとする所なり。

余は自叙体を用ひて此篇を草せり、思ふに諸君が或は讀むに堪へずと云ひ、實傳なるべしと誤想せられしは此故ならん、素より實傳を記さば何人の生涯も一篇の好小説となるべし、されど余はもとうき世にものせしが如き不幸に遇はず、只世の慘狀を見て大ひに感ずる所あり、時を得ば悲慘を極めたる小説一篇をものせんと兼て思ひけり、故に余が嘗て見聞せる所と想像を集めて此に一人物を畫き、之を主人公となし、其舌頭を借りて其生涯記を小説となしぬ、勿論實話ならぬ事は今更云ふまでもなし讀者夫れ之を諒け。

ヴヰクトルユーゴ嘗てラミゾレーブルを著はす、或人之に序して曰く凡そ社會上の罪即ち人類の罪惡によつて生ずる災害の發せぬ間は斯の書は無益とならじと、悲狀慘哀を模寫する所以のもの亦多少世を稗する所あるべし、人各其見る所の異なる恰も其面の同じからぬが如し、是或人は快樂の樣を寫し或人は慘狀を畫く、何れを見て何れを叙するも素より作者の撰ぶ所のみ、何ぞ慘狀と共に快樂の樣を寫さゞる可からずと云ふの理やあるべき、其繼母云々の語に至つてはもとより言語同斷辨するに足らず、其他の事も亦然り、一々解明んはくだ〳〵しければ此處に省く。

余や未だ小説なるものを書きし事なし、今年始めて筆を採る、而して幾多讀者諸君に疑慮を抱かしめぬ、誠に余の罪深し、嘗て某女史書を賜ふて曰く作者の病を見舞はんとす、住所本姓を示せと、余爲て之に答へて云へり、余の記する所誠に小説に過ぎず乞ふ安んぜよ、君をして斯く思はしめしもの實に余の罪なり、今より後余亦小説をものする事なけんと、されど諸君之を記せよ、曰く小説は素より空中の架閣、空想の撰説なりと云へども、讀者をして其架閣撰説なるを忘れ、眞説實話の如く思はしむるを可とするを、余は自ら誠く何故に余の拙作が人をして實傳と思はしめたるかを、思ふに是深き理由のあるに非ず、先に云へる如く自叙体を用ひたるが故なるべし、何となれば我國に於ては此体甚だ少なければなり、されど西洋の小説に至つて此体を用ひる共だ多しとぞ、余嘗て佛國人の著なる某小説を讀み、其傑作なるに感服せり、是余が自叙体を採りし所以なり。

尚記さんとする所あれど此に盡す、若記するの必要を見ば亦他日更らに記せん。

秋立てる後三日、雨霽れ、日清き朝、風涼しく、水清き所にて記す。

かほる

寄書

女學子に與ふ (前號の續き)

古は人の位置を換て、下等社會に生れたを悲だ、足の疲れし時、眼に寫る者は、二匹引きの黑塗りの馬車であつた、御者の威張るに顧みれば、金光燦爛たる紳士、綾羅錦繡の貴婦人と揚々自得、相對坐するを見た、歸路に着きし時、近く聳る、巍然たる大厦高樓に、酷く心持がした、己の茅屋に入れば、不快の空氣は、室に充ちて居つたと思ふた、食に向ふて、無端、思ひ起す王公貴人の珍饌、朝な夕なの悲み嘆き、常に失望、常に落膽、此幸なき世を喞ちて、露の命を棄てんとせし事、其れ幾許ぞや、之を救ひし者は、女學雜誌である、余は記者に向て、感謝の言葉を知らぬ、只に救はれし已ならず、余は、最大快樂を教へられた、其れは、敬神と云ふ事である、ホームの美と云ふ事である、下等社會にも、神は幸を降す、下等社會にも、ホームの美はある……然し余は今、理想のホームである……未來のホームの、理想である……此ホームが、余を懸より救ひ、苦を變じて、正しく、樂しき男となした……男……日本社會では、男が非常に跋扈して居る、然し、此世界は、男許りの世界でない、男女の世界である、神は、男のみの神ではない、男女の神である、神は男一人と、女一人とを選で、美なるホームを造れと言ふた、夫婦は、眞に平等にして、互に尊卑あることなし、夫の剛、婦の柔、能く親和力を起して、社會の要素となる、人々ホームを美にして、社會美となる、社會に盡すの道、ホームを美にするに在り……嗚呼、余のホームは美なり、未來のホームは美なり、未來のホーム、能く其人を高潔ならしむ、況んや、現時のホームをや、ホームに、失望なく、落膽なし、ホームに、苦なく、悲なし、ホームに、溢るゝの愛情あり、ホームに、默禱奨勵あり、喜びの聲、外に聞へ、樂の空氣、内に充つるの家あり、是處にあるの人は幸なり、眼は靈妙の力を以、無形の美を見るも、有形の惡を見ず、心は天外の妙理を悟るも、俗世の卑猥を知らず、身、下位に居て、塵埃に埋れず、超然として、常に群族に拔んず……嗚呼ホーム、余をして、潔淨ならしむる者は、汝なり、余をして、正道を踏ましむる者は、汝なり、汝は、外に對して、勇氣となり、博愛となり、内にあつては、愛情となり、親和となる、汝の呼吸する所、空氣は盡く清淨となり、芳香馥郁たり、汝の步む處、地は盡く塵埃を掃て、砂石歸く、汝の聲の加る處、邪惡變して、善眞となる、汝の手は、不正を亡し、汝の足は、姦惡を退く、卑猥の闇境、汝の眼光に消滅し、純潔たる志操、汝の容貌に團結す……嗚呼、ホーム、汝泣かば、余も泣かん、余が泣かば、汝も亦泣く、汝の淚は、余の罪を洗へり、余の淚は、汝の憂を洗はん……嗚呼、ホーム、余は、汝に依て生活す、願くは、汝も、余に依て生活せよ、汝は、余を樂ましめんと、勉むる勿れ、汝は、汝の樂を求めよ、汝の樂は、即ち余の樂なり、余も亦、余の樂を求む、願くは其樂、亦汝の樂とならんを、汝は余なり、余は汝なり、其間、別あるなし、若し別をなさば、即ちホームを割くるなり、ホームを殺す者なり、ホームにして死せば、余は、何の樂あつて長へん、余は、眞に誓ふ、余は、其死生、榮枯得失、必す共になす事を、余又思ふ、美ならざるのホームは決して造る可らずと、余は若し、美なるホームを造る能はざれば、寧ろ、理想のホームを以、滿足せん……嗚呼、美なるホームよ、余に來れ、人に行け、汝行て、此腐敗を去れ、此汚穢を洗へ、此不正を矯めよ、汝の行かざる處、臭氣紛々、卑猥世を蓋ふ……嗚呼、汝を知らざる者は、醜なるかな、彼等は、姉妹を器械視し、奴隷視し、子女を玩弄し、賣買す、或は泥中に沈みて苦め、或は身躰を束縛して泣かしむ、此行爲、天に逆ひ、理に戾り、情を傷り、心を欺く、彼等は、快樂を渴望するも、眞正の快樂を知らざる者なり、彼等にして、若し知らば、速に先非を悔いて、速に其行を改め、假令、理想なるも、ホームの快樂を求むるならん、斯くして、人々其職に安じ、悉く、人生の目的を達し得るなり……嗚呼、ホームの美……之を知らざるの人に、知らしむるは、實に必要なり、其任は、之を知る者にあり、余等も幾分か、其任を負ふ、然れども、悲むべし、志想十分ならず、口訥、筆鈍く、文拙くして、此重任に當るに足らず、是に於てか、萬腔の熱血を洗て、既往の厚意を謝し、將來の博愛を望む、記者願くは、其純潔なる志想を以、其清淨なる文字を以、其流麗なる文章を以、其高妙なる感化力を以、蠢子弟の誘導に怠らざる事を、記者の芳名、既に世に高し、爲に感化せらるゝ者、幾許ぞや、今記者の功績を思ふて、轉禁する能はず、拙き筆に寫しぬ

交詢

みれ子

●大坂尋問生　御尋問の速記獨習の事につき御答へ申しましよふ今速記法を實地に學びたる人に聞きまするに獨習にても學べぬ事はないと申します、さりながら隨分一人では困難であつて上達も速かならぬとの事ですつまり教師に就て學ぶのが最も宜しひと云ひます世に速記學獨習書が多くありますが何れも不完全なるものと思ひます、而し之に就て長き時を費したらば遂には出來る樣になりましよふ速記學を修むるには熟練と云ふ事が最も必要でありますで成るべく度々演說や說教亦話しなどを筆記してだん〳〵に上手になるのが最も宜しひ方法でしよふ故に一人で獨習書を讀み之を暗記したとてそれで速記はできません、相手のある所にて次第に熟練するが宜しひのです教師に就て學べば大抵一年にて一通りは修められると云ひます。

●上の人　津村氏の販賣に係る酒不可飲といふ藥は實地服用せし人の話によりて大に功能があると申します、多數の人の内には或は身躰の工合によりて此藥の功なきもありましよふ、亦何か此藥の力を打消す樣なものを知らず〳〵飲食する事もあるかも知れません斯る事なくして身躰尋常のものならば必らず功能あると申します私は未だ酒を飲まぬ故實驗を申し上る事はできません只人より聞きたるまゝを申し上げますのみです。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

○北海道離宮

事苟くも皇室に關すれば、其記事如何にも莊重謹嚴なる、愛友「日本」新聞に云く、王靈臺を經始す庶民子の如く來るとは古聖人の稱ある周文王の美德なり聽に離宮を北海道に置かるゝの治定あるや道の民は皇德の邊隅に及ぶを相賀して一日も速に靈臺經始の盛擧あらせられんことを渴望し或は木材或は石材又た或は金額を獻して御造營の費の萬一に補あらんとを請願するもの數を知らす誠に盛德の致す所にして昭代の美事と稱へつへし然るに掛りの官人は未た御沙汰もあらぬ今日斯る請願は成規上受理すへき限りにあらすとて一々道廳より却下せしめたれば請願人はいと本意なげに黯然と罪類を儞にして歸れりとか北海道通信の端に見ゆ御成規は去ることゝながら庶民子來の美事なるに冷淡の却下とは聖代に有るまじき官人の取計ひにあらすや斯る事は御聖德にも關するものなれば成規は成規として別に處分方はなきものにや。

實に左ることありとせば、冷腸此上なきことにして、其情けなきに、涙のしたゝるを覺へて止まず。

○英國女皇、一私民に惠與す

スタンレー氏既に婚し、テナント孃は最早スタンレー夫人と爲りぬ。結縁の日、祝品山の如し、中に一きは目立ちたるは英國女皇陛下が、ダイヤモンドを以て飾りたる其細肖像に、スタンレーの偉功を賞めたる玉書一通を添へたる御贈り物にてありける。

○コレラ病

いよ〳〵激烈ならんとす、時事新報は其救濟金を募集するに至りぬ。慈善の人願はくは起り立ち、夫々の力を以て可成く救濟預防に盡力あらんとを。

○能樂の末路

能師の中に様々の故障ありて、不容易の騷動沸々として起るよし、兎に角氣の毒の事なり。吾人至つて此技を愛し、亦た大平の世、尙武の代たるに此の如き遊事なかる可らずと信じ、其の衰ろへて行くを見て多少の煩感なきにあらず。迚も德川時代の如くには得爲さるまじきと勿論なれど、切めては其資格を違し、浮滯紙の如く、輕經らみ殼の如き遊戲の淫なる時世に、此の優にして雅あり、沈にして韻あるの舞をば、生存せしめたしと思ふ也。

○好色會

聞くだに忌にしく、語るだに不快なるは、静岡縣下豊田郡中瀨村と云ふ所ろに、匿名の如き淫らなる會を設けんとする計畫あるの一事なり、政府は言論を自由になされても差支へあるまじ、斯るものをこそ嚴しく抑制ありたきものなれ。

○觀劇會

又た聞きたくもなきは、婦人觀劇會なるもの起らんとするの知らせ也、赤見常子、寺田靜子とは何人にや、自から發起人となりて頗ぶる之に盡力すと云ふ、必らすしも演劇を以て惡しきものと云ふにあらず、左れど目下わざ〳〵觀劇會を開くほどの時勢にもあるまじきに。

○戒大煙會

支那に亞片の貿易を禁ぜんとする耳ならず、併せて支那人が之を飲用するとを制止せんとするは、共に英國人中正義の人なり（前號時事亞片禁止同會盟の項參觀）。ボムベーのダイヤー氏は過日わざ〳〵之が爲めに支那に來りたるほどなるが、夫等の爲めか、支那に一の禁煙會起れり、號して戒大煙會と云ふ、今まボムベー、ガーヂアンに掲げたる同會約單を見るに左の如し、

入會約單

第……號應許終生守約入會人
年……歲係……人

入會者應許五條

一 不食不飲不吸鴉片
二 不栽種罌粟花亦不帮人收種
三 不買賣亦不帮人買賣
四 盡心盡力用諸善法除滅鴉片之害
五 勸人亦如是

光緒……年……月……日
戒大煙會員

支那人既に如此し、前の二つの如き會を設けんとする者須からく慚死すべし。

○ダイヤー氏慷歎

ダイヤー氏は英國著名の義士なり、既に英國に於て幾多の矯風事業を成し、今や印度ボムベーに渡りて、其公娼を廢せんとに盡力す。七月のセンチナル雑誌に、氏が過日支那の傳道會に臨める時の感を記したるものを載す、中に云く、

數日前余は此等近大會の亞片禁止部に臨みたり、余央ばにして、一の支那人起立したり、其風采高尚にして、感慨の念面てにかゝやき、非常の熱心を以て演ずらく、我邦人の此の惡習を除かんは決して易き事にあらず、他邦に在る我同僚の兄弟、キリストの前に於ける我同胞に、切にお祈りあらんことを請はんと。余は實に思へり、我れ英國人は支那に此毒物を賣附け、非常の罪惡を犯し居れり、切めては今まで之を止めて其過ちを謝せざる可らず、昨の罪すでに消す可らずとも、今日改むる遲きにあらず、今日尚改悛せば更らにいよ〳〵惡也。

○動物保護付

動物を虐使するを禁止するの會、文明國には盛んに行はる、吾人も屢ば記載したるとおりさて、此頃ろ來遊したる英國人シロック氏は、ボムベーに於ける一新聞の主筆にして兼て動物保護會の會長たり。氏が三週間日本に滯在したるの感を同國メール新聞に投書したるものを見るに、日本人も亦外部に於ては、獸人に害はんとせば、市中の盛大なる紳士諸君は、何故殘酷なる行爲を許容し、且見るが如き乾燥なる罪惡を禁止せざるか、此土多くの宗教徒あり、而して佛教は物語にも親切なるべきことを屡々教へ居るに、其信徒は目前に之を見て何故に冷觀放任するや。

○佛蘭西の絹

蠶絲の作物は、日本婦人に賜はりたる天の大恵なり、願はくは彌々養蠶のわざを勉めんに、一は婦人の職業を進め、一は國家を大に富さんことを熱望するに當り、米國にても近頃にてし、將來ふりに養蠶に熱心し、特に伊太利の如きは、シヤルドンネー氏が、人造絹の製方を發明したりなど評判して、太だく心配なしたるが、目下農業取調の爲め歐洲に在る、農科大學教授佐々木忠二郎氏より、其家父へ向け、左の報告を送られたる由なり、

今回氏は佛に至り佛、伊、瑞の三國蠶業の慣習調査間の人造絹糸のことを諮問モンペリエー蠶業學校長たるレスツー氏に問合せし處氏は人工にて絹糸を製出することは成し得へしとせしも容易に燃燒する性質ありて且つ光澤も宜しからず到底天然の絹糸に及ぶへき者なしと答へたり右に付也　人工絹糸の儀に就ては頗る有數さす依然として蠶業研究の家に注意致し居れり其後伊國パドゥワ蠶業學校長ベルツー氏に面會し又伊國ミッテ事務所長ボルツ氏にも面會せしに人工絹糸の件に付くは何れも同樣の者を聞き居候是に依て之を觀れは目今佐山本の蠶業家が人工絹糸の事を喫驚し且つ之れに患はされて蠶畑を桑林畑に改めんと試むる如き事誠に不實なりとせは實に驚愕の外なし假令今後大學者輩出し天然糸と同樣の絹糸を製出する場合ありとするも決して蠶業家に損耗あるとなしと確信せり况んやシヤルドンネー氏の發案に係る人造絹糸の如きは取るに足らずして單に珍奇の見せ物として觀るべく未だ以て實用に適するに足らざる者なや云々。

○英國に兒を殺すの鬼あり

と聞かば最も不審なることなれども、此頃ろビショップ、ピーターブルフが上院に建議し、幼兒生命保險法の改正案を述べて、

幼兒の生命保險料を拂ひ置き、特更らに之を殺して、弔死料を投んとを計るもの少なからず。故に、今後保險料の額を定め、且つ弔死料を四弗乃至八弗より多く與へざることと爲し、之を與ふるには確かなる醫師の診斷證明書を要し、且つ其兒の開觀並に葬式に合したるものに直ちに渡さるゝことと爲すべし。

と云へるに依りて、之を思へば英國の貧民社會、殺兒の鬼極めて多きことを推知すべし。ボルミングハムは繁盛の都會なり、然るに其地の名望ある醫師某の言ふ所によれば、每年平均一万人の殺兒者ありと、驚ろくべきの慘酷に非ずや。

○女護島

といふことは八丈島の事なりと附會するものもあれども畢竟一種の假作的世界なるべしとのみ思ひ居たるに眞實女護島と謂ふべきものゝ南洋に之ありとは驚くべし。瓜哇島中バタヴィヤ府とサマラン府の中間にバムダムと稱する國あり和蘭に貢獻すれども猶ほ獨立の形を具へ獨立したる小國ながらも頗る富有なること非常にて往古より之を隱し之を防護することを婦女の職掌とし尤も君主は男子なれども其他の國政に關係するものは悉皆婦人たり國王は虛位を擁するのみ之を助くる内閣は三名の婦人より成り立ち國務官、宮内官、特設兵士一として女性ならざるはなく男子は農夫商人たり國王の騎衞兵も矢張り婦人なれども又能く男子の騎馬法に熟し王位は長子に相傳すれども國王死去すれば政府の護衞婦女相會して一同の生みたる兒子の内より一人選擇し之を適法の國王と公布す。（東京新報）

○ライダア女史の來信

左の一文は數さに印度の女史關秘女史と共に渡來されたる米國婦人禁酒會の特派員なる醫學士ライマー、ビー、ライダア女史がボンベイ滯在地より此程小妹及び東京婦人に宛て書簡へ寄贈られたる者なり令女學雜誌に紙面の割愛を乞ひて東京婦人禁酒會の會員、氏に示す

東京禁酒會　潮田ちせ

謹啓陳者昨冬「クリスマス」の頃東京婦人禁酒會へ寄贈の書翰一通差上候處其後今に返書に接せす小妹より差出候書狀の途中に紛失等にて不達に相成候歟にてはなきかと大に疑念を生じ候節昨東京婦人禁酒會の運動上如何に可有之哉深く配慮致候本年相提見次第禁酒會中並及び小妹滯在中御厚意を受けし會員諸姉諸氏の起居候に貴會の愛友同諸姉御通信下候度小妹滯在中大演説會を開き候節名失念致候間御氣の毒樣ト候得共末に御記載を願ふ。

ラマバイ女史學校の爲めに働居候尚ボンベイに於て小妹の發起にて一の文學會を設立致候これは印度に於て土人の爲めに右の如き會を設けし事は今回を嚆矢と致候目下會員は百廿五人にて二週間に一回つゝ開會致候文章の朗讀討論等にて小妹は集會毎に社會改良の爲めに働居候姉妹の小傳世の摸範となりし女傑の小傳演

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

說致候多くの女子善く記臆致候樣子に御座候尙追々當地の[illegible]情御通信申上候尙日本にある諸姉妹の健康を祈り併て御雜報を拜讀するの時を待居候早々拜具

千八百九十年六月十七日　ポンペイニ於テイマー、ビイ、ライダア

潮田千勢様　及ひ
東京婦人矯風會の會友諸姉

○電話女技手

遞信省にては今回彌々電話交換の事業を起さるゝに付中央局に勤務して通信を取扱ふ技手は米國の例に傚ひ一切女技手を採用する事となりたる趣きは已に聞く處なるが右女子採用の方法は廣く試驗法に依り召募し右試驗の程度は小學全科を卒業せし位の學力ある者又た當局者の意見にては成るべく電信技手の妻女等を試驗の上採用する目的なりと聞けり。

○卒業女學生（四）

前號に靜岡縣尋常師範學校女子部新卒業生十九名ありと記せしが其姓名及住所左の如し

高井しげ。（見付高等小學校）吉澤さら。（加島尋常小學校）木原じゆう。（靜岡高等）渡邊てつ。（三島高等）松岡しづ。（靜岡尋常）酒依こま。（靜岡高等）柴田こずゑ。（二俣高等）村松はな。（靜岡高等）松塚しゆん。（濱松尋常）矢部かく。（濱松高等）香取さみ。（掛川尋常）佐藤しげ。（濱松高等分校）山形てい。（沼津高等）人見おさ。（靜岡尋常）小村崎いく。（江尻尋常）稻葉しづ。（吉原高等）黑澤よね。（藤枝高等）森まる。（加島尋常）萩生さみ。（沼津尋常）

右の中、高井吉澤の二孃は學術操行優等證を得、木原松塚の二孃は操行優等證を得、他は尋常の證等を受けたる由。俸給は高きは一ヶ月金拾貳圓より低きは金六圓まで。

●淵澤なのへ女史　是迄に文部省高等女學校の取締たり、感ずるとありて辭職し、私宅に幼兒保姆場を設きて親から敎育し、子なき人の子あるが如く、親切忠實に敎育せられ居たる同女史は、此度山縣總理大臣の勸誘に隨ひ、同大臣の父君迄が關係せらるゝ長州赤間關の私立女學校に聘せられ、去六日出立ありぬ。

●塚本ふじ女史　ギウリキ女史と殆んど同一轍の途を踏み來りたる同女史は、四年間米國に留學して一層普通學敎授の法を修めんとて、去九日井深梶之介氏と共に出發し、ペンシルバニヤ州シヤンベルスブルグのウイルソン、カーレーヂに向ふて洋行ありぬ。

●杉江たづ女史　同女史は大坂梅花女學校を卒業し居ち久しく新潟英和女學校に敎授し、同校長成瀨仁藏氏と共に尤も熱心に獨立女學の事に盡力せられ居たるが、此度五年間留學の見込を以て又た渡米あり、前途未定のよし追て記載す。

●村立製糸傳習所　江州犬上郡日夏村にては今回村會の評決を以て村立製糸傳習所を開設するとに決し即今生徒三十名を募集中なるが敎師には彥根の勝野チナ子を聘し去る十日より開業せり。

●伏見產婆養成所　京都府にては豫て產婆の改良を計らんとするの計畫にて先づ市内の產婆の養成に着手したるも郡部に至りては實際着手し難き事情もありたり然るに伏見にては近來漸く產婆業改良の必要を感じ愈々來る九月十五日頃より同地板橋尋常小學内に伏見產婆養成所といふを開設し該業の改良に着手するとさなりたり。

●花卷婦人會　フエリス女學校卒業生平野はま子、此頃ろ花卷に行き、花卷婦人會を起し、月二回會合するとに定まりし由。

●長崎のコレラ　は最も猖獗を極むるが、第五高等中學校醫學部の生徒三十七名は自から奮つて檢疫に從事せらる、縣下皆な之に感奮す（通信員報）

●德山白蓮女學校　の生徒は避暑のため歸鄉中生徒各自の宅に於て隔番に談話會を催し女學を研究するよし。

●上州前橋共愛女學校　は群馬縣下安中原市伊勢崎高崎嶋村（組合一致天以天）等の基督信徒有志者の設立せしものにて前橋町大字曲輪町にあり英漢和文學より唱歌裁縫料理に至るまで女子普通の學科を敎ゆ現今の校舍狹隘なるを以て目下前橋町の北方高燥の土地に寄宿舍を新築せり敎師は宣敎師米人メーレー、エッチ、シエツド嬢外四名にて寄宿生は現今十四名通學生十餘名あり（通信員報）

廢娼記事

●上毛潛勢力

○近きに上毛各地の青年諸氏が勃興して狂奔疾呼せし廢娼運動の結果は十分なる成効を見る事能はず僅かに縣下安中始め新町三ヶ所の妓を廢止せしむるに至りたるのみなれども此廢娼運動の影響は隱然上毛の空氣を一洗せし者と見え何地の妓樓も昨年來ます〳〵寂しく成り行くとの報道のみより一方に於ては斯くの如き隱然の勢力を見一方に於ては縣會議員をはじめ幾多の有志家は縣知事の指示に滿足せずして[illegible]白せし程の場合なれば本年九月更らに三ヶ所の廢止さ共に相聯提携して大運動を爲さんと各地の青年諸氏は其用意に汲々たり目今青年聯合會の事務所にて南甘楽青年會より常任委員を派出せしむる事となり各派の諸會合とは孰れも頻々相往來して打合せ中なれば早晩一勢に起りて其氣勢高潮なる運動を爲すなるべしと思はる。

○上毛青年會の諸氏は去る六日前橋（劇場）敷嶋座に於て學術演說會をひらき廢娼大運動の時期來れりと告白せり辯士は石嶋任谷鑑治久野佐和加藤開根神東諸氏にて聽衆四百餘名ありし。

●神奈川縣廢娼運動

横濱青年會が去年廢娼の論を發起せしより以來大家を聘して大演說を開き或は會員各々意見を公會に吐露し一時縣下の注目する所となりしが四も東も全じ來縣員撰擧の競爭特の外烈しき爲め自然社會の眼はこれに注ぎ廢娼論一時中止の躰なりしが撰擧の事も已に其終局を告げ社會の眼は稍や他事を顧みるに暇を得たるものゝ如く於是因より止むべからざる廢娼論なれば主張者等は再び其運動を始め全縣下の有力者の贊成調印を求めて知事に建白せんと佐々木[illegible]郎相川富三郎の二氏は今縣下の遊說を依賴し本月初めより其運動に着手したり先づ市内の有力者を說かんとて二方に分れて嚴しき炎熱を冒し月を踏んで奔走し居たり島田三郎氏は

勿論爭存なく調印せられ中嶋信行氏は今日まで政治部面の潔白度々我民間に行るれたれども嘗て之れに調印したることなし然れども其善とするもの﹅爲めには關者の中間に立ちて幹旋する反て調印より効力多きを知れは廢娼は固より贊成する所なれども上述の如く余が長所を爲すの外調印は出來難しと尤も此は多忙の時なればとて同氏の夫人を以て傳へしものなりと然れども中島氏夫人俊子氏は異議なく記名調印せられたり兎に角中嶋信行氏は廢娼純白に調印こそせざれ大なる贊成者なり。其他目下奔走中なり（横濱青年會員報）

●周防三田尻

去十七日同地の周陽學舍に於て山口縣佐波郡青年倶樂部員廢娼論に就て一場の討論會を催したり此れを當地に於て青年が婦人に關する問題の第一着手の運動となす。

通信

千葉縣千葉町

女學校

當縣下に女學校と云ふは師範學校女子部あるのみにて生徒は僅かに三十名其の敎育方法は文部省規則通りゆへ今茲に喋々せず他には一の女學校あるなし是れ當縣下は東京と一葦水を隔つるのみにて凡て男女を問はず學問修業せんと志すものは東京とは左程さ學資も相違せざる點下るさに止まりて勉學するの不得當なるを知れは爾て女學校の設立も見さるなる可し只千葉町に高梨みつ女の設立せる産婆學校あり本科は守年速成科は半年にて卒業し卒業生に縣廳より産婆免状を下付するとの事にて當國盛大に赴けり是れ一に縣下に産婆の不足せると現社會がそろく産婆の必要を感し來りたるに起因するならん乎。

婦人の會合

婦人の會合は師範學校女子部卒業生の同窓會か年々一二回宛開かるゝあると千葉町に婦人衞生會なるものあり會長は渡邊某外に幹事數名あり隔月又は月々會合し第一高等中學附屬病院醫員の演説あるとあり又雜誌も發兌せり然し内部は思ふ樣には發達せざるものゝ如し嘗て會員の一人野生に向て曰く婦人衞生會も近頃漸やく役員撰擧の出來る樣になれり此れ迄は撰擧と云へは云ふもの﹅誰れ一人先きにして投票などなすものなく互に顔を見合せてはエヘ々々と笑ふのみゆへ不得止指名せりと此の言以て該會の一般を推知するに足る可し。

週報

○官令　本週法律第五十八、五十九、六十、六十一、六十二號勅令第百六十一、六十二、六十三、六十四號等を裁可公布せらる

○宮廷　八日天皇陛下幅害院に臨御あらせられ皇后陛下は青山御所へ行啓あらせられたり

○政治　六日内閣會議に各大臣參集せり●七日山縣、山田、芳川三大臣登閣せり●八日内閣會議開かる●九月内閣會議に山縣、山田、芳川、陸奥、の四大臣參集せり●十一日内閣會議に山縣、山田、芳川、陸奥、の四大臣參集せり

○會社　六日芝公園彌生館に於て水產會社總會を開けり

○新聞　七日江湖新聞休刊せり同日北海新聞は發行停止を命せらる

私立 明治女學校生徒募集並移轉廣告

女塾の通弊を憂ひ、此度び、家族主義、一名、別舎主義と稱する、新なる塾舎の管理方を工夫し、校内に小舎を別々に設置し、一舎に十八以下の塾生を容れ、主婦一名を添へ、料理家政の事を實際に行はしむ、即はち塾舎を一家族の如くにするの主意なり。之が爲めに、本校從來の地手狹と爲り、且つ別に本校の都合あるを以て、此度び下六番町六番地に移轉し、講堂及び塾舎を新築す。但し始業は例年の如く九月十日の事。學年始めに付、最下級以上の各級に新入生を募る有志の人は九月八日迄に申込あれ。校則入用の向は郵券二錢封入の上通報ある可し。

東京市麹町區下六番町六番地　明治女學校

東京 女學雜誌社移轉廣告

弊社此度都合有之、麹町區下六番町六番地に移轉す、即はち明治女學校門前同番地内なり。

女學雜誌社

轉居

麹町區三番町六十七番地　巖本善治

會員募集

本會ハ專ラ文章ヲ研究スルヲ目的トス入會望者ハ申込ベシ但シ會費ハ五錢

見本望者ハ郵券四錢ヲ送レ

伊豫松山二番町百六番地　老松文會

本校來ル九月一日ヨリ授業ヲ始メ豫科本科各級ヘ新入生ヲ募集ス有志者御申込アレ

東京市芝區三田功運町三拾番地　私立 普連土女學校

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

東洋英和女學校廣告欄

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に渉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の教員孰れも熟達善良なり然して本校の教授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所なり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地 **東洋英和女學校**

廣告

カロ減順氣散

定價四錢五厘

振出しぐすり

婦人血の道子宮より發る的病男女

四季感冒頭痛其他効能は包書に委し

本家 東京日本橋區通二丁目 須原屋 **北畠茂兵衛**

麻布永坂町一番地 **香蘭女學校生徒募集**

今般校則を改良し本科豫科小學科の外更に尋常小學科を設け九月十日より教授す

看病法講習生募集

年齡十九年以上三十五年以下ノ夫ナキ健全ノ女子ニシテ家事ニ係累ナク常ニ本院內ニ寄宿シ得ル者三十名入學ヲ許ス志願者ハ本院ニ就キ規則書承知ノ上來ル八月三十日限リ願書差出スベシ但入學中衣食ヲ給シ患者ニ附添ハシムル時ハ手當ヲ給ス又入學試驗科目ハ本院規則等ノ讀方簡易ナル往復文ノ作文幷加減乘除トス

廿三年八月

東京本鄉元富士町 **醫科大學第一醫院**

●○脚氣患者諸君よ左の○●

廣告を讀んで世に名灸有るを知り玉はんことを

● 官許專門 天下無比 **かつけ根切灸點術** ●

附言輕症は一二度如何ある重病と雖ども四五度限り全治受合○灸治効能男女を論せずかつけは勿論腰より下の冷て痛む病に大効ある事受合論より證據實驗あれ○當時拙家近邊に類似の家號名乘る同業者出來たるに付番地家號篤と御注意の上陸續御來車あれ

京橋區本材木町三丁目二十一番地松屋橋通り **壽福堂**

通信女學**講義錄** 第八卷

八月十五日出版 價金三拾貳錢 全國一般無郵稅

麴町區富士見町二丁目一番地 **女學雜誌社**

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

●懸賞歌文募集廣告●

本會此度賞を懸けて廣く世の優美にして才藻に富み給へる淑女達の歌文を募り●明治閨秀歌文●といふ書を編輯せんとす其方法左の如し

一歌文とも題は隨意に撰まるべし　一歌文とも可成縱五寸橫三寸五分位の紙を用ひられたし筆跡の特に麗はしきは其まゝ木版にして編中に挿むべし　一御寄附の歌文は當時此道にて最も有名なる落合、高崎、下田、鈴木等の諸大人に托し公明にして懇切なる撰擇を受くべし　一秀逸に登り給へる淑女の名譽を表せん爲め特に其が肖像を請ひ得て卷首に掲ぐべし　一投稿期限は九月十日までとし本書は十月中に出版し賞品と與に發送す　一歌文御寄附の節本書出版費用に充てんが爲め金五拾錢御送りあるべし　一本書に採錄すべき歌文の總數は凡そ三百内外なるべし

賞品

丙點を除き左に掲ぐるの外各々本書ヵ部つゝ送呈す

秀逸

定價拾圓以内の書籍歟は文房器具等御指定の品　貴女之友一號より七拾冊　徒然草、住吉物語、土佐日記、伊勢物語、竹取物語、紫式部日記、枕の草紙、十六夜日記、

甲　貴女之友　一號ゟ五拾冊　和文讀本　壹部

乙　以良都女　一號ゟ貳拾冊

丙　明治閨秀歌文　貳冊

東京府南足立郡千住町元三丁目拾九番地

閨秀歌文會

會計主任者　緒方時子

京都府今出川

同志社女學校生徒募集

本校は九月十六日より授業を始む入學志願の方は九月十日迄に申込あれ規則書は郵券二錢を添へて御申込あれば早速送達すべし

華月館詩文添削批評規則

第一條　詩文ノ添削批評ハ丁寧精密ヲ主トシ吟踊ノ間作者ヲシテ容易ニ詩文ノ秘訣ヲ曉得セシメンコトヲ勉ム

第二條　詩文ノ添削批評ヲ屬托スル者ハ各自隨意ノ謝料ヲ草稿ト同時ニ爲替若シクハ郵劵ニテ送附スベシ

第三條　傑作ハ新聞雜誌ニ登錄シテ作者ニ寄贈ス

第四條　入館金五十錢前納スル者ヲ華月館友ト爲シ證票ヲ付與ス

第五條　館友タル者ハ滿六箇月間毎月文二篇詩五首限文體詩體ヲ問ハズ無料ニテ添削批評ヲ屬托スルヿヲ得但文ノミナレバ毎月五篇詩ノミナレバ毎月十首限トス

第六條　入館金三拾錢前納スル者ハ滿三箇月間館友ノ資格ヲ有ス

第七條　館友ハ詩文上百般ノ難疑無料ニテ質問スルヿヲ得ベシ

第八條　返稿期限ハ館友三日以内其他ハ五日以内ト定ム

陸奥國弘前百石町　華月館　河村巖城

明治二十三年八月十五日印刷
明治二十三年八月十六日出版

東京麹町區富士見町二丁目一番地
發行所　女學雜誌社

編輯兼發行人　東京麹町區富士見町二丁目一番地寄留　巖本善治

印刷人　東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留　森田豐

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

●懸賞歌文募集廣告●

本會此度賞を懸けて廣く世の優美にして才識に富み給へる淑女達の歌文を募り●明治閨秀歌文●といふ書を編輯せんとす其方法左の如し

一歌文とも題は隨意に撰まるべし 一歌文とも可成縦五寸横三寸五分位の紙を用ひられたし筆蹟の特に麗はしきは其まゝ木版にして編中に挿むべし 一御寄附の歌文は常時此道にて最も有名なる落合、高崎、下田、鈴木等の諸大人に托し公明にして懇切なる撰擇を受くべし 一秀逸に登り給へる淑女の名譽を表せん爲め特に其が肖像を請ひ得て巻首に掲ぐべし 一投稿期限は九月十日までとし本書は十月中に出版し賞品と與に發送す 一歌文御寄附の節本書出版費用に充てんが爲め金五拾錢御送りあるべし 一本書に採録すべき歌文の總數は凡そ三百內外なるべし

賞品

丙點を除き左に掲ぐるの外各々本書ヶ部づゝ送呈す

秀逸 定價拾圓以內の書籍或は文房器具中御指定の品 貴女之友一號より七拾冊 徒然草、住吉物語、土佐日記、伊勢物語、竹取物語、紫式部日記、枕の草紙、十六夜日記、

甲 貴女之友 一號ヶ五拾冊 和文讀本 壹部

乙 以良都女 一號ヶ貳拾冊

丙 明治閨秀歌文 貳冊

東京府南足立郡千住町元三丁目拾九番地

閨秀歌文會

會計主任者 緒方時子

京都府今出川

同志社女學校生徒募集

本校は九月十六日より授業を始む入學志願の方は九月十日迄に申込あれ規則書は郵劵二錢を添へて御申込あれば早速送達すべし

華月館詩文添削批評規則

第一條 詩文ノ添削批評ハ丁寧精密ヲ主トシ吟師ノ間作者ヲシテ容易ニ詩文ノ秘訣ヲ曉得セシメンコトヲ勉ム

第二條 詩文ノ添削批評ヲ屬托スル者ハ各自隨意ノ謝料ヲ草稿ト同時ニ爲替若シクハ郵劵ニテ送附スベシ

第三條 傑作ハ新聞雑誌ニ登録シテ作者ニ寄贈ス

第四條 入館金五十錢前納スル者ヲ華月館友ト爲シ證票ヲ付與ス

第五條 館友タル者ハ滿六箇月間毎月文二篇詩五首限文體詩體ヲ問ハズ無料ニテ添削批評ヲ屬托スルヿヲ得但文ノミナレバ毎月五篇詩ノミナレバ毎月十首限トス

第六條 入館金三拾錢前納スル者ハ滿三箇月間館友ノ資格ヲ有ス

第七條 館友ハ詩文上百般ノ難疑無料ニテ質問スルヿヲ得ベシ

第八條 返稿期限ハ館友三日以內其他ハ五日以內ト定ム

陸奥國弘前百石町 華月館 河村巖城

明治二十三年八月十五日印刷
明治二十三年八月十六日出版

東京麹町區富士見町二丁目一番地
發行所 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京麹町區富士見町二丁目一番地寄留 巖本善治

印刷人 東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留 森田豐